

# 江戸名所圖會

二

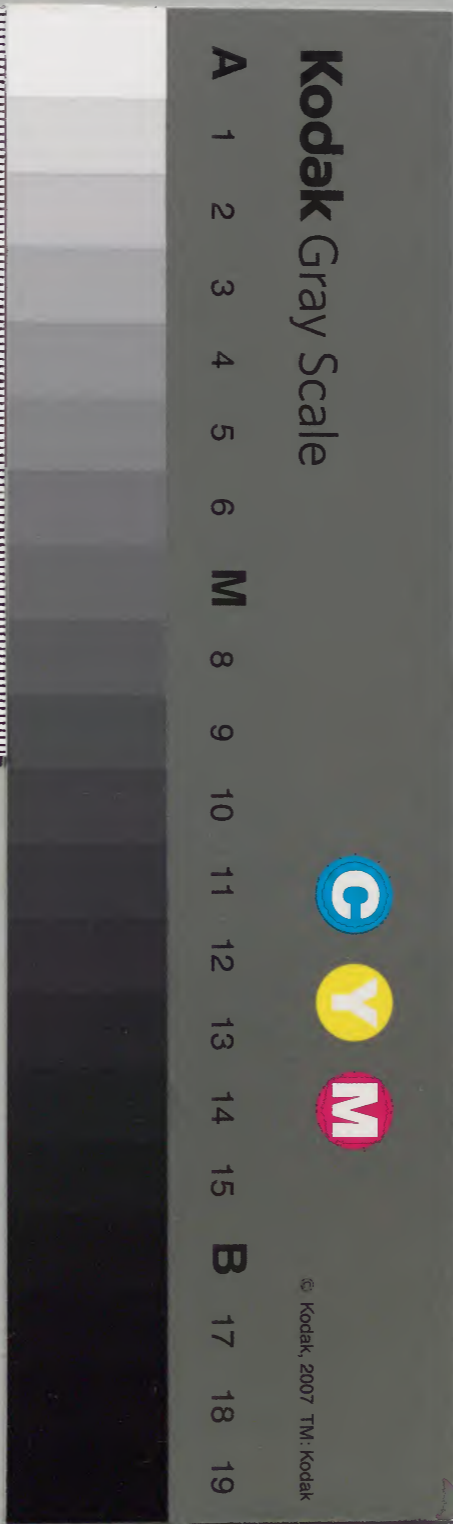
農商務省  
農商書  
第 號  
共 册

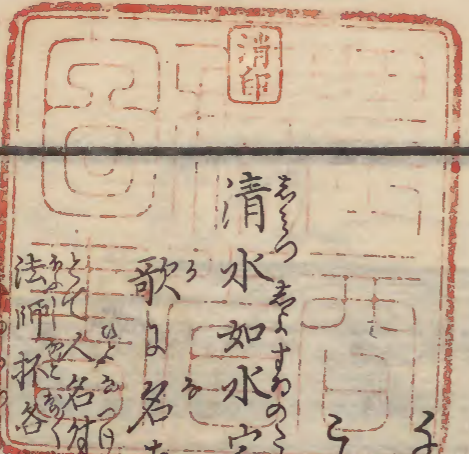
大政官文庫  
和 書 門  
一 一 一  
二 三 八  
二 一 一  
九 一 七  
冊 架 函 類

內閣文庫  
和 類  
一 三 八  
二 三 七  
七 四 九  
冊 架 函 類

內閣文庫  
番號 和 11387  
冊數 19 ( 1 )  
函號 174 31

174-31





連ね燈の光ハ玲瓏とく流小映中樓船扁舟所せくもひつ  
 一時水面を覆ひかへてあつても陸地は異ならず弦歌鼓吹を  
 耳小満く囂く実小大江戸の盛更なり

此人叔和ふまハアをささみみの那ノ共角

子人々多を標櫓やそそみ同

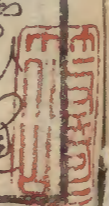
清水如水宅地 横山町に住るる水ハ藤根堂と号に狂

歌名あり 常小酒を飲む時ハ此水ハ藤根堂と号に狂

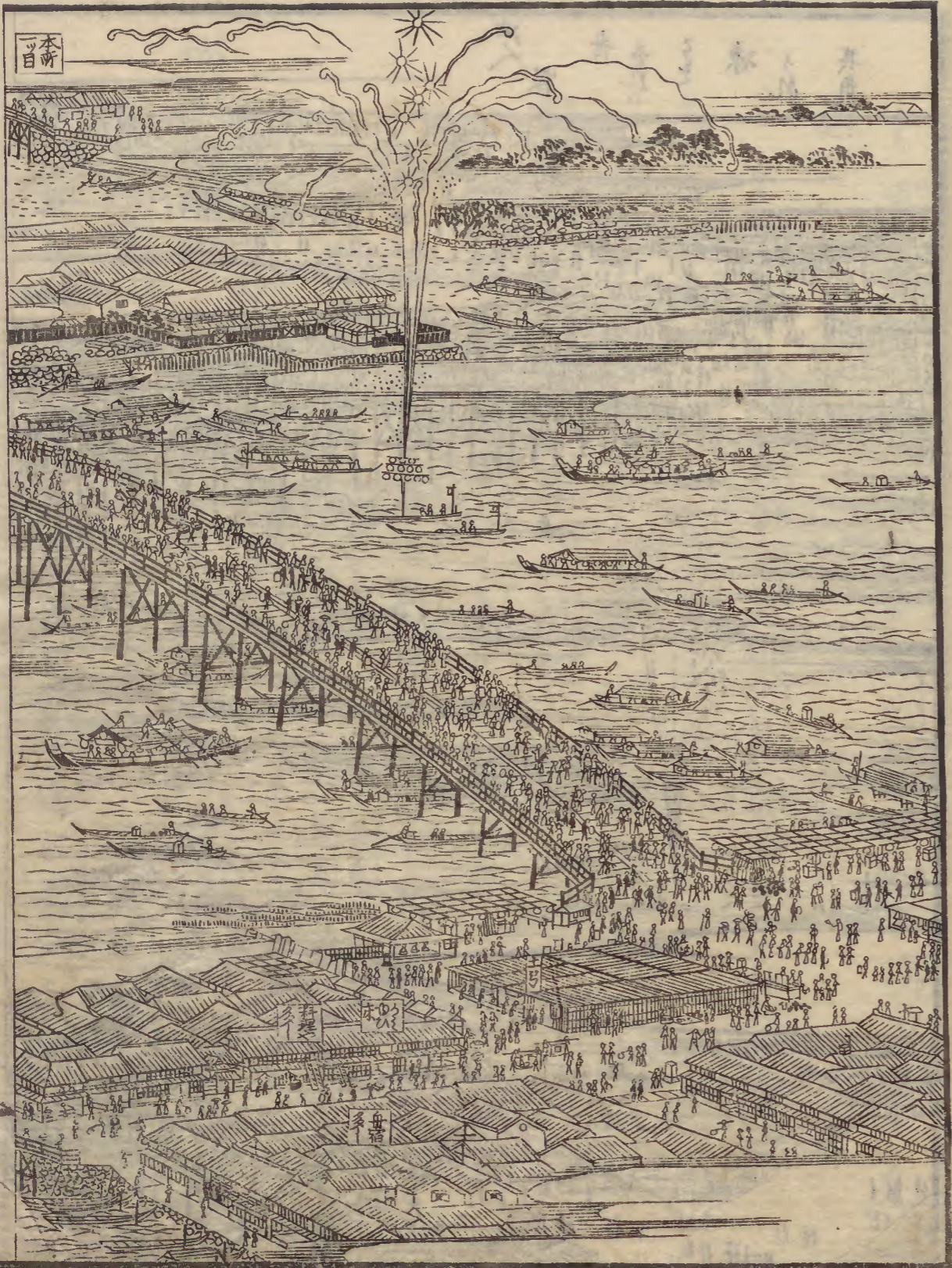
如水一時大和國法隆寺に蔵する所の賢聖の瓢との器物を  
 見ると後飄々彫物をささみを得たりあるも鈍刀を用ひて

其巧尤絶妙なり依て所需多うりこれハ此匏瓜の爲ふ身を

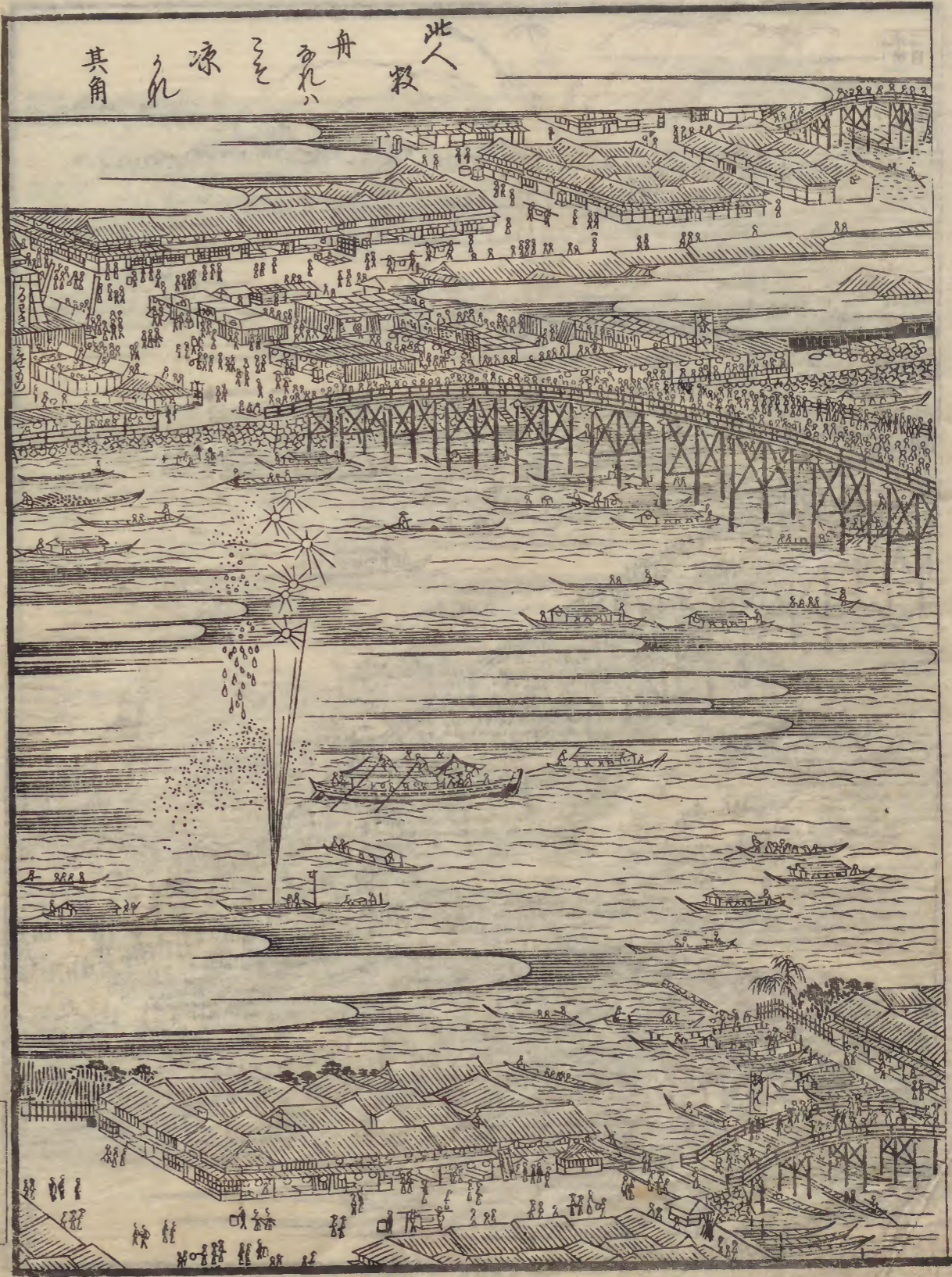
押へられりとの意ゆく自ら迷淵蟠鯨候とそ名のりる住家



16-471



四十四



其人 舟 氷 其角

あり東ノ菜研堀と云西あり其辺知人の許は行く樓上より  
遠近を見ゆる

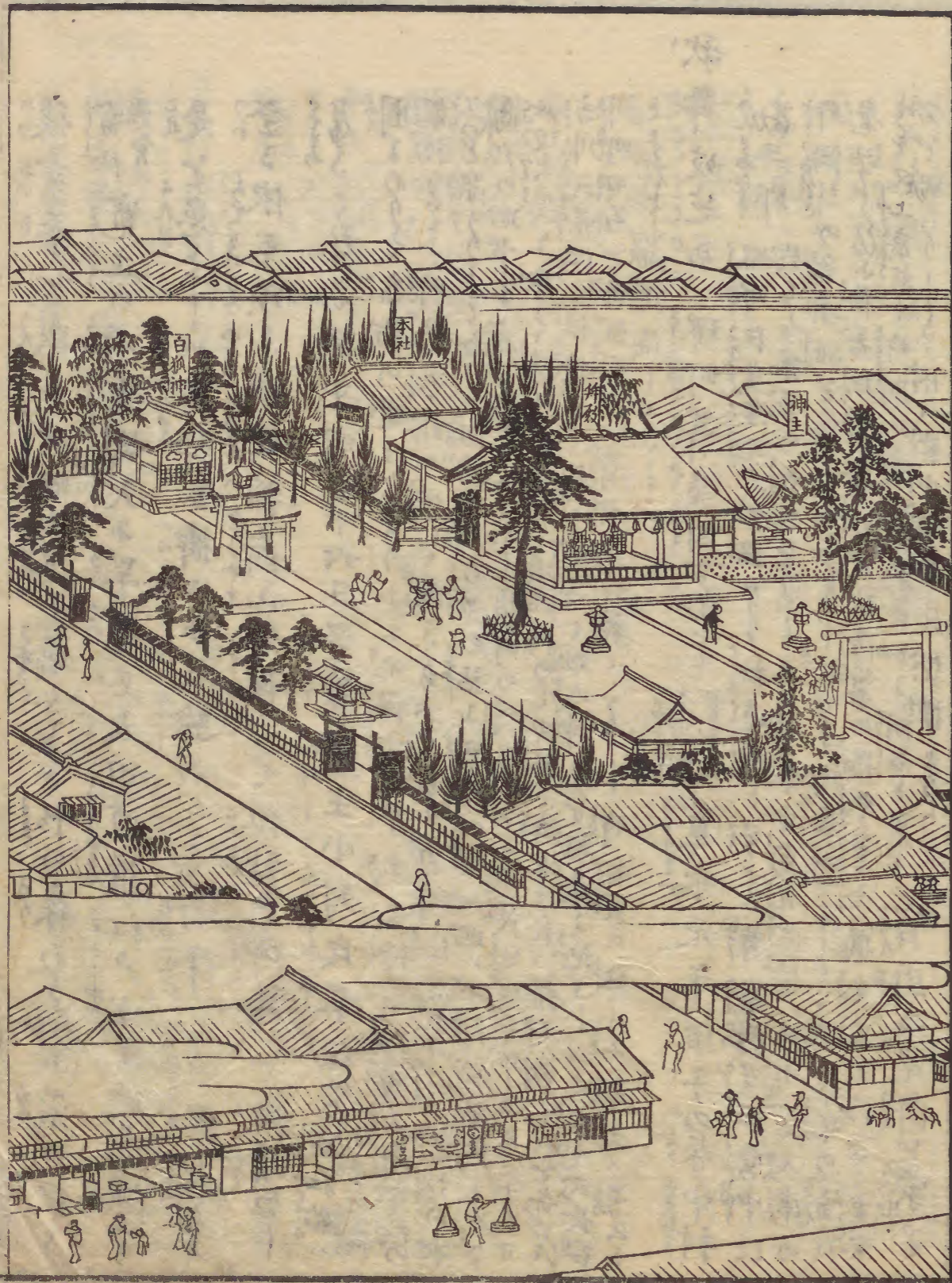
又ある時漢父の辞の意をよめる  
世をあり後世の濁河碑を後してさうらの水

享保十三年戊申正月三日朝起り  
公引嚙喰地倉雷火の喰日飢饉なるを國へゆく

かろそ同し五日の暮方剃頭湯あり太神宮を拜し  
しあふ終とせり

記をかしきり後文を如睡と改めし  
杉森稻荷社 新林木町あり

相馬の将門威を東國へ逞し  
の計策を廻り此神の加護依り遂に将門を亡し

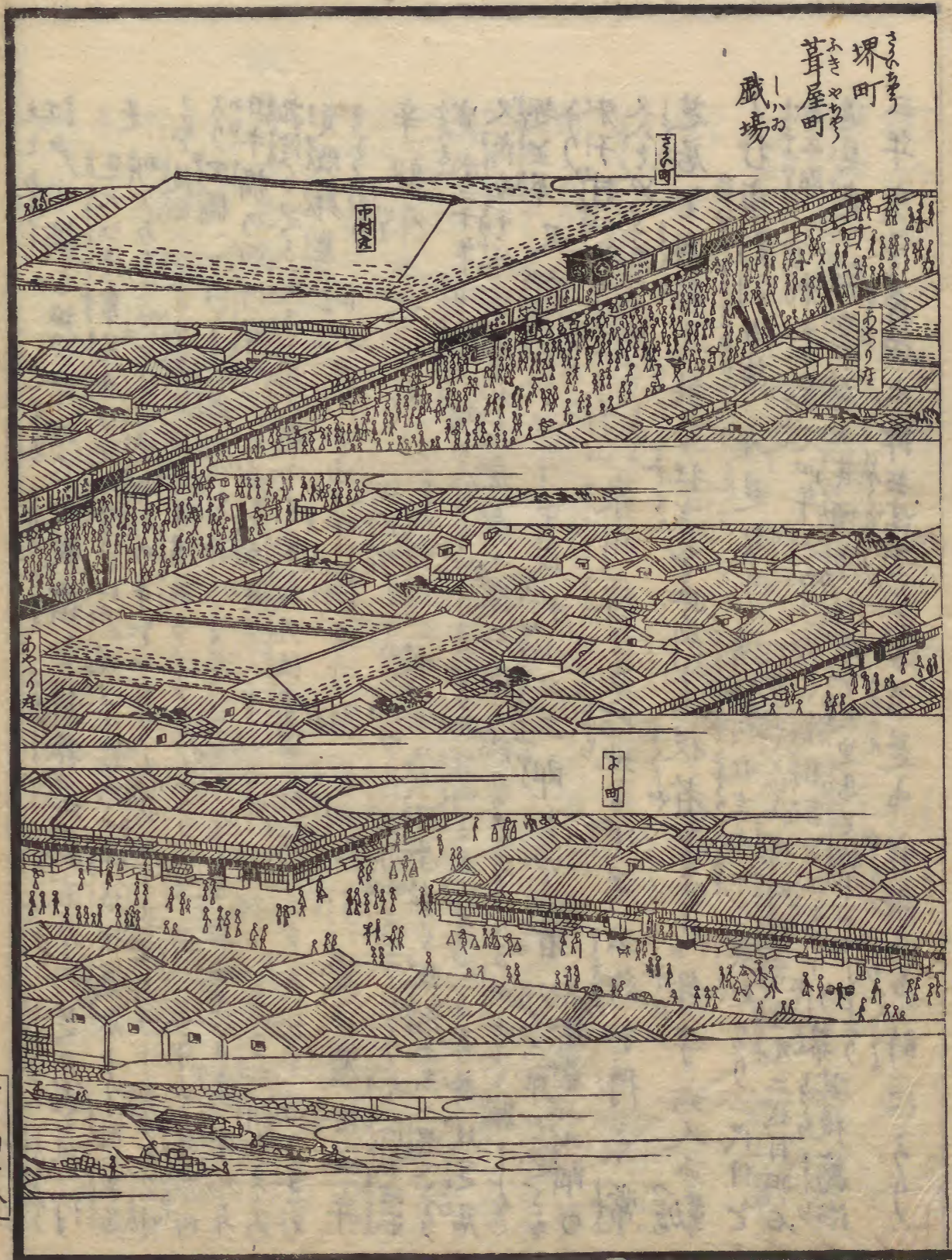
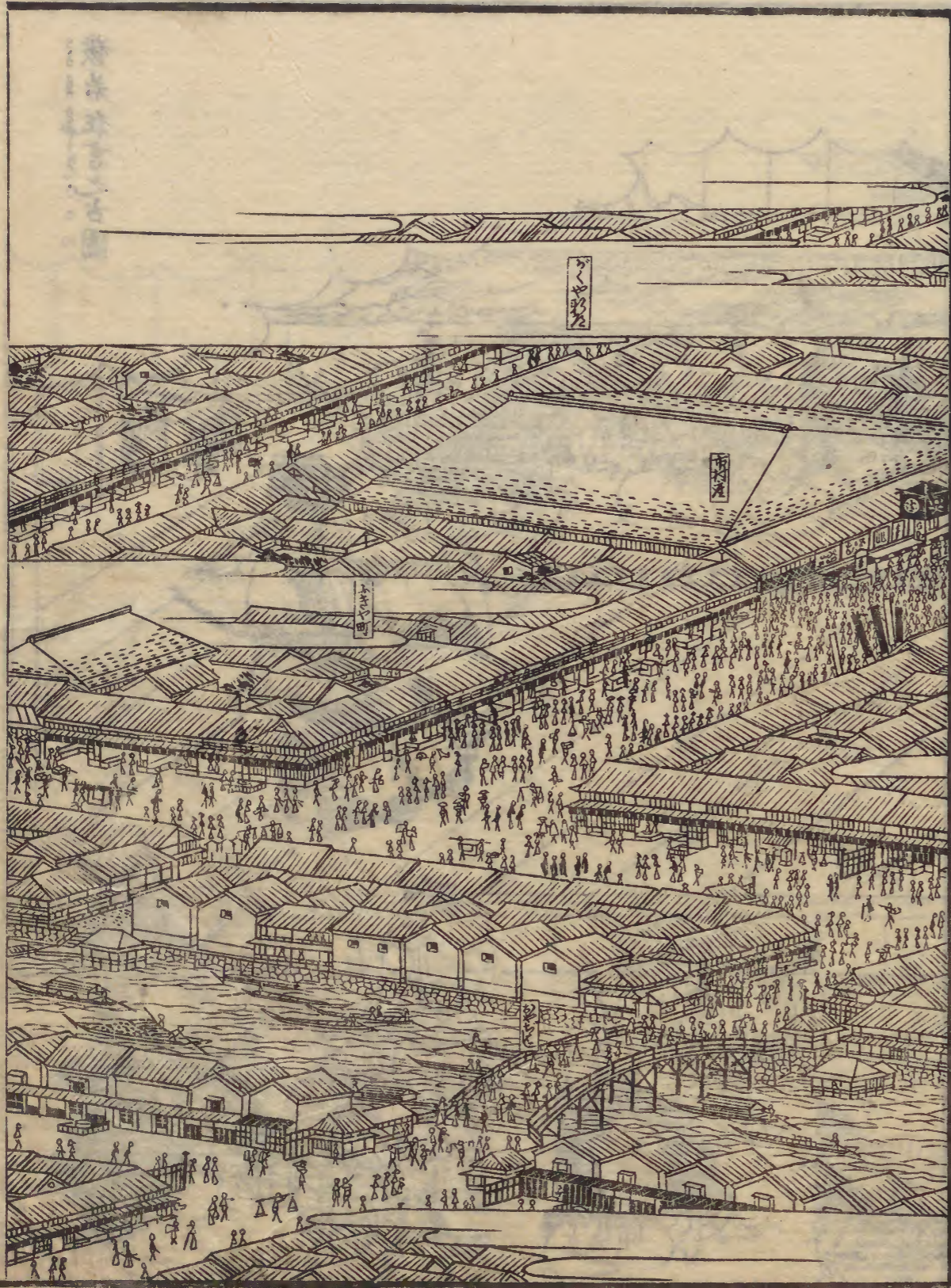


杉森稻荷神社  
Sugimori Inari-jinja



一ノ四十六





堺町  
葺屋町  
戯場



猿若狂言の古圖



八四十九



木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎とて者  
二男又七とてを養子とて名を森田勘弥と改む  
同卷木挽町 其餘塚町菅屋町の間に操座木偶芝居ありて四時  
の下の詳 元禄初年の江戸鹿子堀菅屋町の二丁ハ古より操見せ物又ハ狂  
賑のり 言及ありハ放下の品玉堀切の曲を業とせし者も寄あり終日  
観承をる地ありとあり又江戸名所を説く江戶大薩摩土佐の太夫和泉美  
浄瑠璃天満八太夫江戸孫四郎江戸判太夫説経鶴屋源太郎南宮あゆりあり  
とてを述べてあり

吉原町舊地

和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり

俗稱なり此岸の電河岸と字するハ電屋多きたの 慶長十七年庄司甚右衛門  
との者街と一所は定めあり度旨 官府は訴へたり一初  
初て此地を賜り花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸は定ま  
たる傾城町もあく二軒三軒つゝかゝる散在せし其中軒を  
並へりハ麴町八丁目わく十四五軒あり何れも京六条あり  
近る又鎌倉河岸も十四五軒大橋柳町も廿軒あり一と云

此大橋と云ハ今のどきハ一ハ此柳町ハ駿府弥勒町より移り外伏

見夷町奈良木辻等ありも追々大江戸に移り慶長十一年の頃

柳町の地ハ召上り元誓願寺前へ引移り傾城屋とも打寄

相談の上場所取立度由願ふれとて浄免なると庄司甚右衛門

初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃竹付元和三年霜月地

形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ一統の後初て関基せ

必急かく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麴町より

引同二丁目ハ追々来り上方の傾城屋を置り一兩年中で

普請悉く成就せりハ新町と名付り角町ハ京橋角町あり

うの寛永三年に至り五町全く家居落成し此地に移る

然も明暦二年浅草の後の地へ遷るんをヤとて

とも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火は焼亡す

依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る



大門通  
 昔此地は吉原町  
 あり一頃の太  
 門の通り多  
 しくありかく  
 名づく今銅  
 物屋馬具町  
 多く住り

淺  
 ひの  
 らぬ  
 日  
 市  
 の  
 戸  
 ま  
 の  
 角





半井  
下巻

系

三河まの

移り

川もあは

船もあは

山もあは

橋代永



新大橋  
三派

門子入る教を受世は其名を聞ゆる者本居宣長橋千葎平  
春海藤原宇万伎揖取魚彦及び倭文女等之  
家集

是る橋十四年の秋濱まわりの人衆をこの川に  
遊ばせしむるは相よほりてあつたかへなむと  
名をあらわすはひてたてまつる九月十三日お月あそん  
とてあそびし人々ついでにあそびつたふりあり

こほりしれはあつたの衆をよほりてはしる人々  
あつたのちの衆をよほりてはしる人々

あつたのちの衆をよほりてはしる人々  
あつたのちの衆をよほりてはしる人々

聖ひきしあつた衆をよほりてはしる人々  
あつたのちの衆をよほりてはしる人々

あつたのちの衆をよほりてはしる人々  
あつたのちの衆をよほりてはしる人々

新大橋 西國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長  
九百八間あり此橋は元祿六年癸酉始て是をわけあふ西國橋の

旧名を大橋と云故よそ名よよ川と新大橋と号らるるなり  
風羅神日記 元祿五申年の冬深川大橋

初まやあつた衆をよほりてはしる人々  
あつたのちの衆をよほりてはしる人々

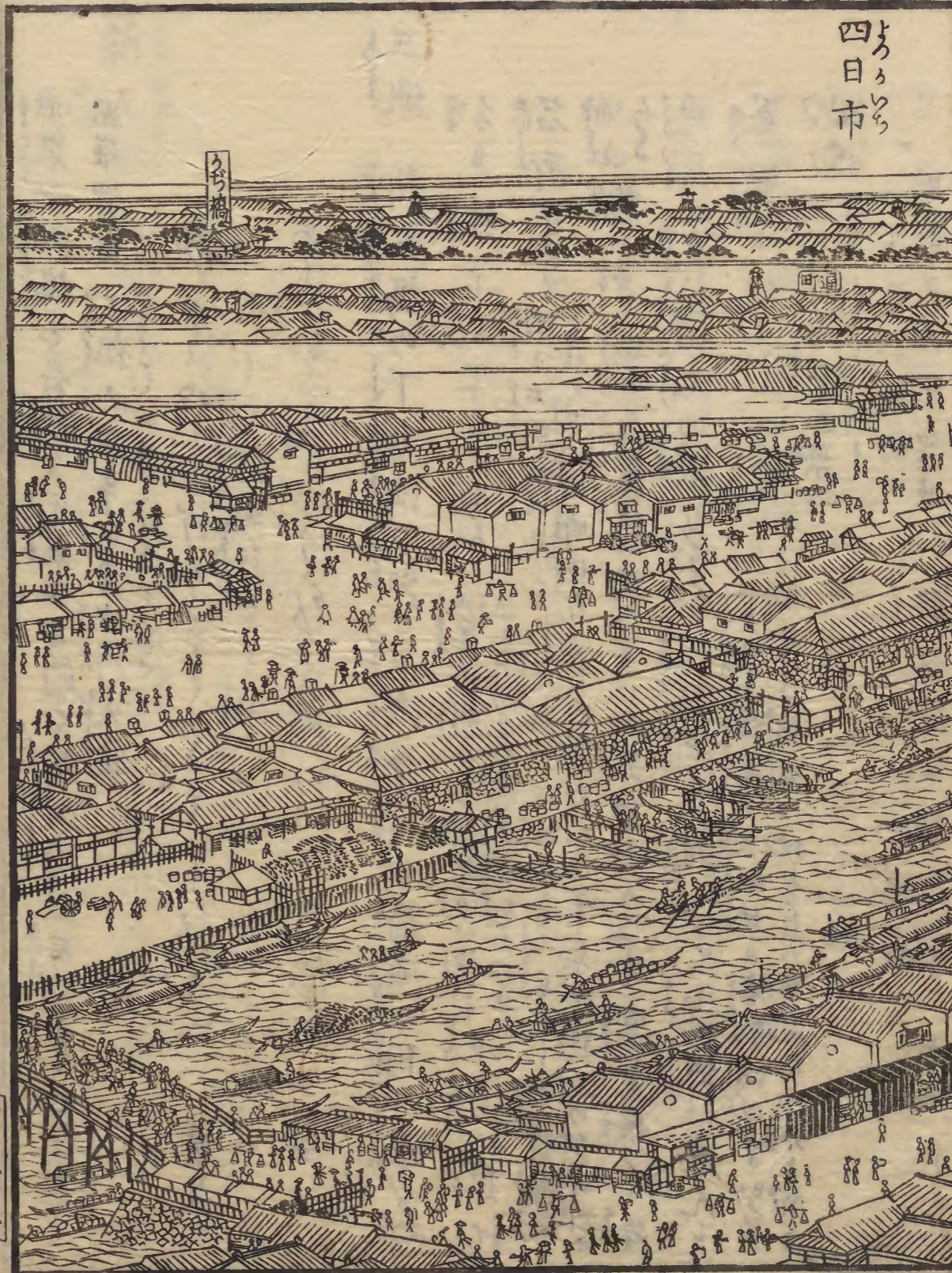
三派 新大橋の下分流の西と云浅草川と箱崎の間の流との

名所なり 因に云明和八年辛卯中流を埋理し人居住し中洲と稱せり  
堀立 昔は多く遊女奇舞妓の類ひるふ船をうらうら宴を催し殊

更月の夕ハ清光の隈なきを翫ひ酒は對して奇諷ひかんと  
甚賑一かりしとあり

風吹のさらり芦の葉の  
笛吹なりしと云

三又江は舟  
風静又江不起波  
輕舟汎々醉中過 春臺  
天遊只









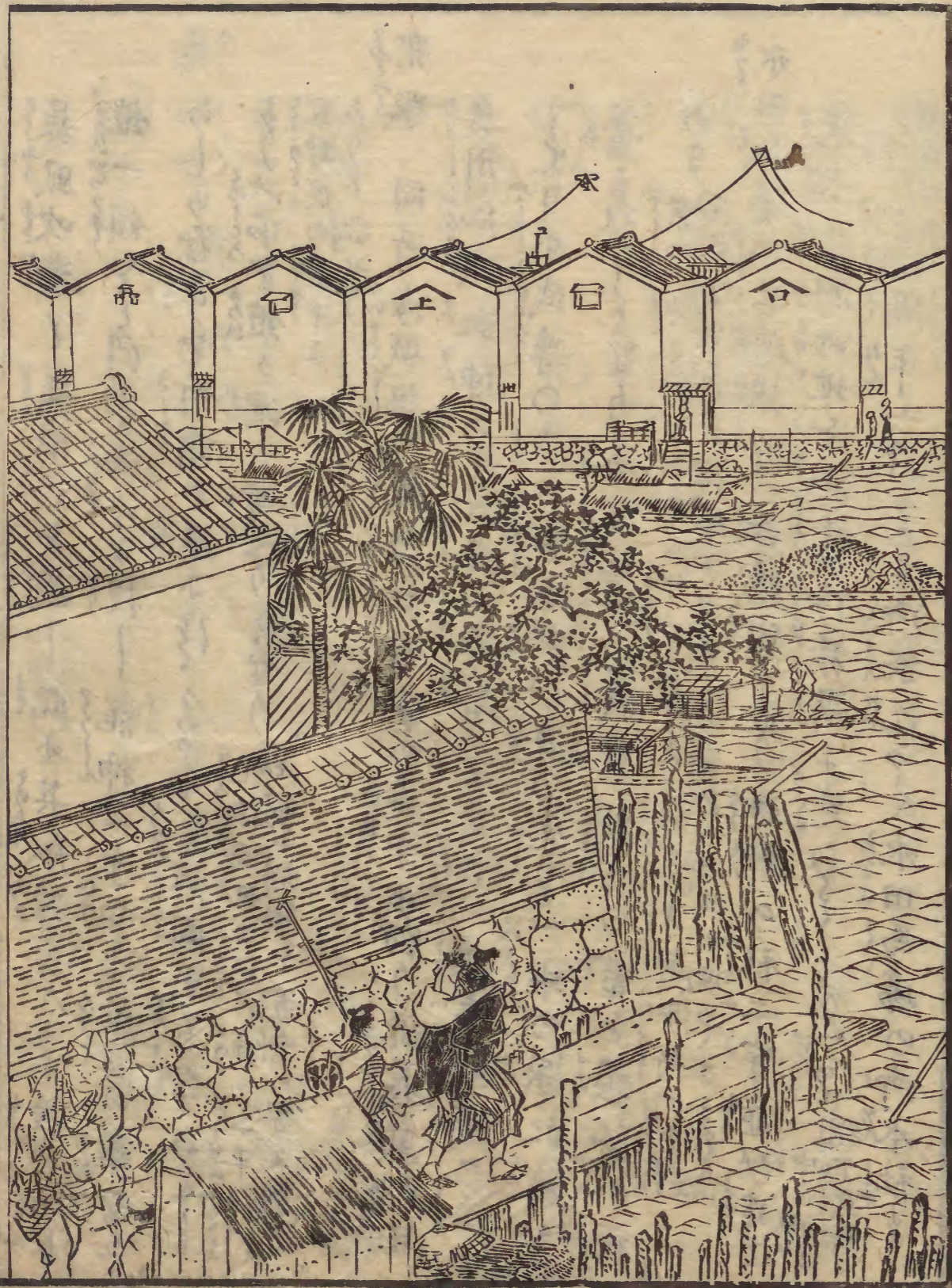
南傳馬町  
祇園會  
御旅所



市を立たたたりとそあふ今も其遺風草物又ハ野菜の  
 類ひ其余乾魚などの市ありて繁昌の地なり此地に根津の  
 権現の御旅所あり 正徳年中中に造 同所河岸に傍らず封疆截  
 あり下より石を以て置揚上家根を覆ふ 明暦間板のむきはあ  
橋の南萬町より四日市連の御屋を取除け高さ四間は川端にありて今熟岸島に四日市と  
北より東西二町半に土に截を置あけらすと云々今熟岸島に四日市と  
とる町家ありて此所あり引きられりとす

祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻あり本社ハ神田  
 明神の地にありて祭所素盞鳴尊中にて是を大政所と称せり  
 毎年六月七日らよ神幸ありて同十四日帰輿一なる其間赤詣  
 多く甚あらはしむとす

鎧の渡茅場町牧野家の後と云此所より小畑町への舟渡を  
 あり唱へしり往古ハ大江なりとなる里諺ハ云永兼年間源  
 義家朝臣奥州征伐の時此所より下徳國に渡らんとす時に



暴風吹發し逆浪天を浸し既ふ其船覆らんとも義家朝臣  
鎧一領をとり海中に投し龍神は多向く風波の難なる  
りしむるを祈請を遂ふはくなく下徳國小着岸あり  
あり此西を鎧の淵と呼へりとなり  
元禄開板の江戸鹿子平持門  
此西の兜鎧を置兜塚に築く

兜塚 同所海賊橋の東詰牧野家の庭中少あり源義家朝臣

奥州征伐凱陣の先報賽のめ且ハ東夷鎮護の爲と

し日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き

簞多ひしなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮付小祠

あり紫の一本とる双糸は甲山とあり藤原秀郷平持門を討

永田馬場山王御旅所 茅場町あり 遥拜の社二宇並ひ建

寛永年間此地を山王の御旅所と定らしとあり一宇ハ神主  
樹下氏持

一宇ハ別當 隔年六月十五日御祭礼ゆく永田馬場の御本社より

神輿三基此所は神幸あり假し神殿を儲け供物を献備し

別當ハ法樂を捧げ神主を奉幣の式を初ひ夜ハ入る帰輿

なり其行装神大幣菅蓋錦蓋雲のめく社司社僧ハ騎馬よ

跨り或ハ輿に乗し前後ハ扈後を諸侯よりハ神馬長柄鎗

をもと出されし途中の供奉嚴重なり又氏子の町よりハ思ひ

練物ありハ花屋臺車樂等ハ錦爛純子杯のまん幕を打

ち各々出立花やハ羅綾の袂錦繡の裔をきりし粧ひ

巍々堂々として善美を尽せり此日 官府の御沙汰として

神輿通行の御道筋ハ横の小路ハ矢来を結ぐハ往

来を禁せしる実ハ大江戸第一の大祀ゆり一時の壯觀なり

薬師堂 同く御旅所の地あり本寺薬師如来ハ惠心僧都の

作なり 山王権現の本地佛ハ慈眼大師勸請しあり

と縁日ハ毎月八日十日正五九月廿  
中納言 門前二三町の間植木の

六月十五日

山王祭



家木

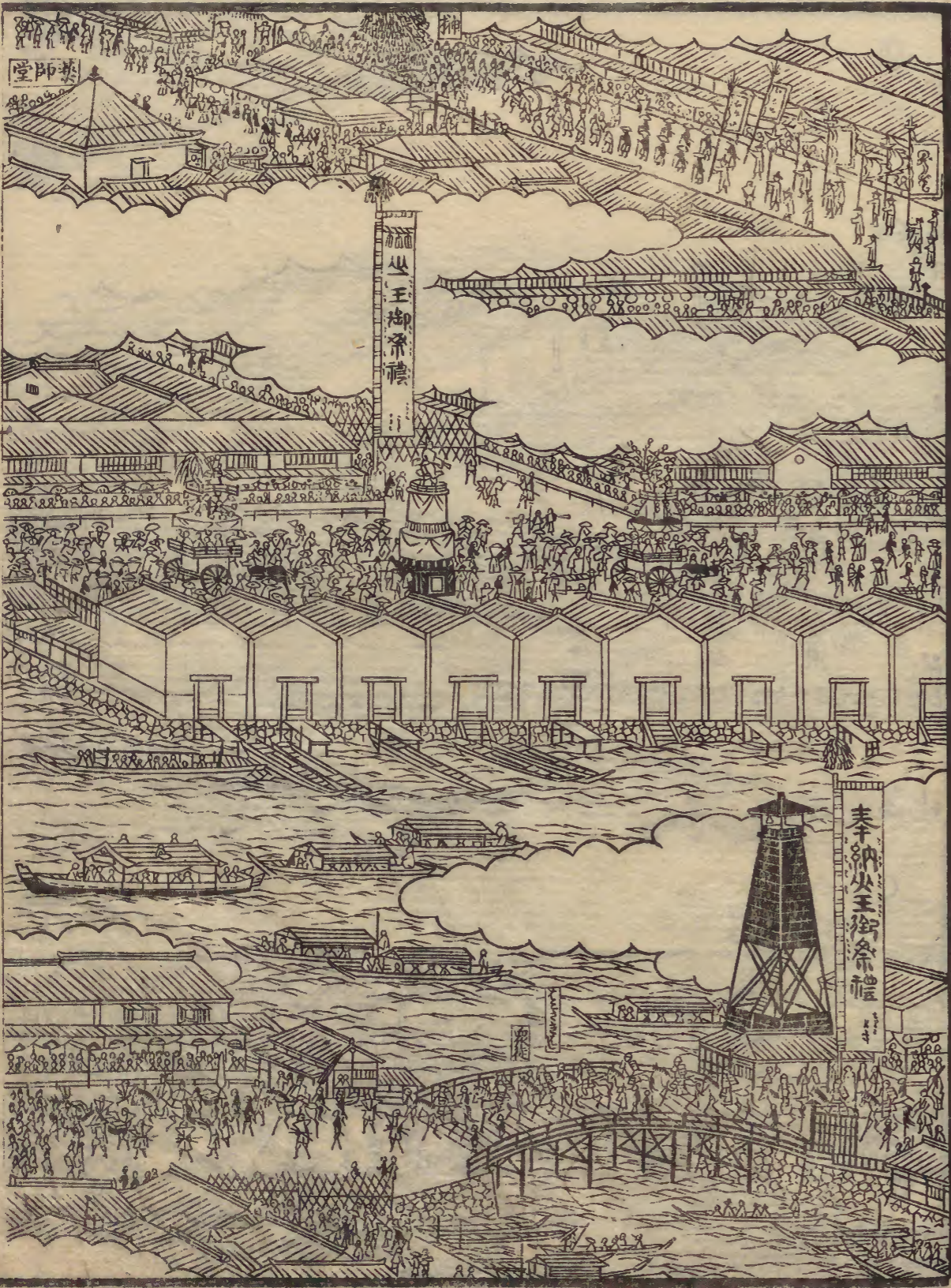
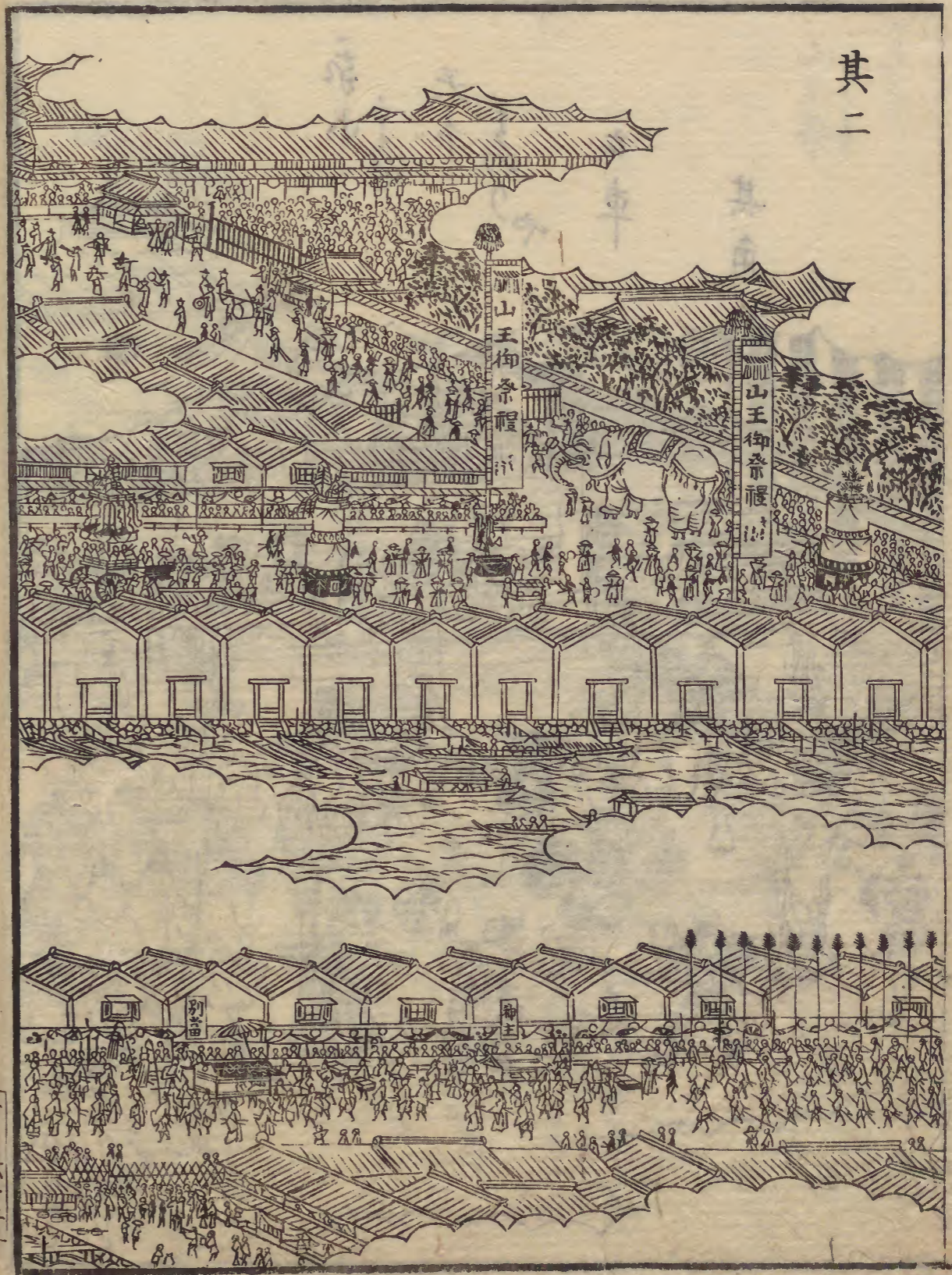
天下

まのや

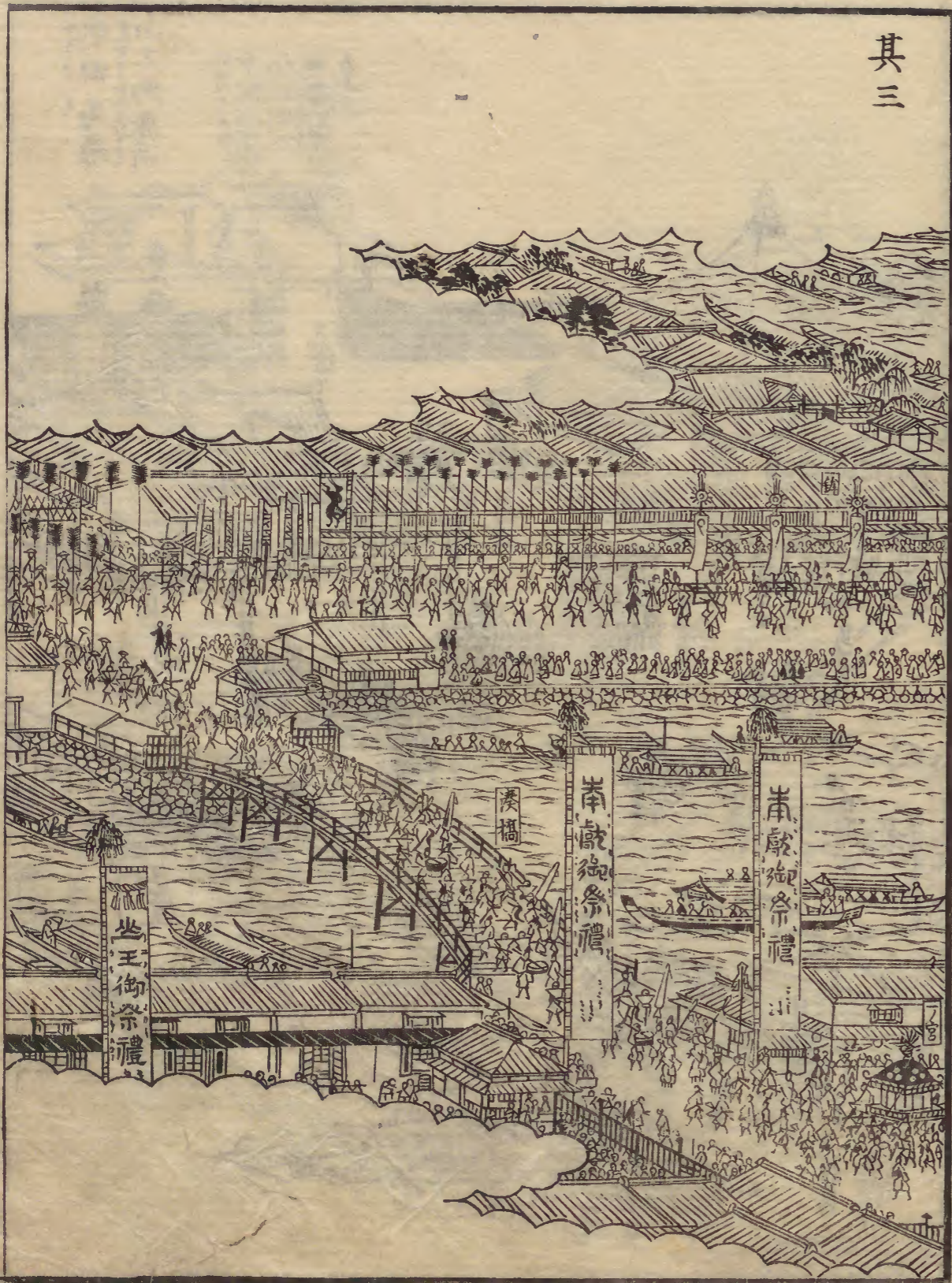
云車

其角

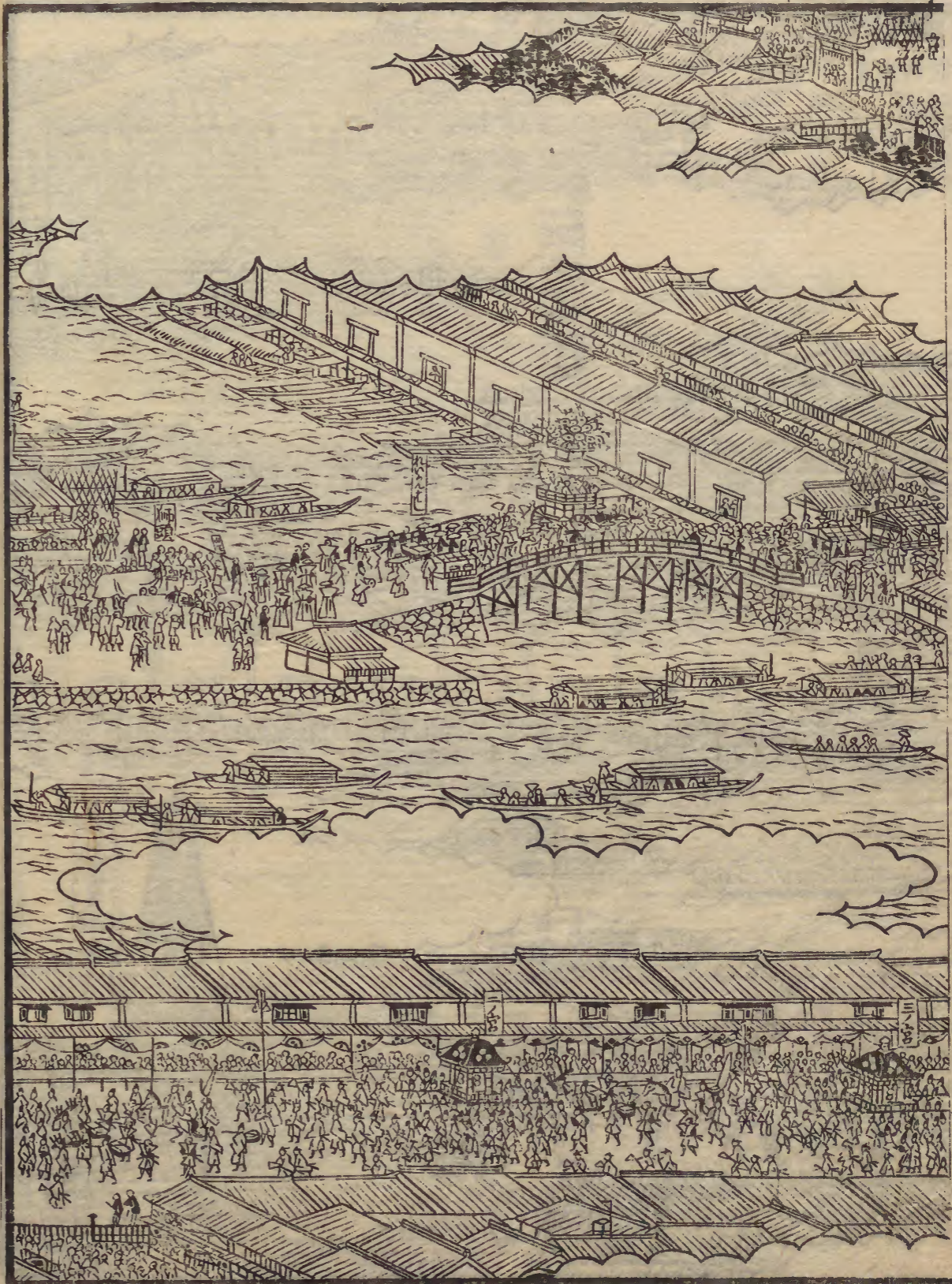




其三



山王御祭



萩場町  
薬師堂



六月十五日  
山王御旅所  
永田馬場  
山王宮



毎月八日十二日  
 薬師の縁日  
 本と商  
 影  
 群集  
 賑えり



夕  
 夕

風の

其角  
 角







伊雑大神宮



勸進聖判職人尽  
歌合の内花と獅子舞

たご  
まの  
あけ  
まの  
獅子  
たご  
鼓  
あし  
ほ

道達院



護ハ萱と同一字義ありハ称せられありあり此地ニ住せ  
られしなり知る

伊雜太神宮 北八町堀松屋橋より一町を隔て良の方塗師町代地

町屋の間よりあり 當社此所を字土俗磯辺太神宮といふ

伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮ゆゑ祭神ハ伊佐波登

美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口

市正某伊雜宮より移しまゐり通三丁目ニ宮社を営り

今神明長屋と唱ふハ則是之 同十年癸酉今の地へ移しなるを例祭を

六月廿六日ニ修行也

三ツ橋 一ツ所ニ橋を三所架せしを呼ぶ北八町堀より本材木

町八丁目へ渡ると彈正橋と呼び 彈正の須今の松屋町の角ニ島田本

材木町より白魚屋鋪へ渡ると牛の草橋といふ又白魚屋敷より

南八町堀へ架せると真福寺橋と号するなり

靈巖島 箱崎の南にあり 町教今十八 昔雄譽靈巖和尚此地の海

汀を築立く梵宮を營く靈巖寺と号く 依り後世靈巖島といふ

島とよひしとあり東海道名所記よまの島も江戸の 地名起り初ハ江戸の中

地とありて東の海中へ築立し島なりと云云 後世寺と深川へ移

されしを跡を町家と名しあり故に此地の北の通りあり

茅場町へ渡る橋を灵岸橋と号けり

隨見屋鋪 同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありといふ

此所は瀬戸物屋多く住せり茶碗 川村隨見ハ諸國の本土を考ふ

鉢店とも号く或隨見長屋ともあり 爾精一かしく大よせは勲功あり海を築き川を堀田畑開

發せ河内國の水を落さんとて堰泉の環は和川を堀淀

川の溢を治んとて大坂より安治川を鑿 隨見自らの実名を安治と

其土砂を以て川下は新よ山を築き洪水の時高波を防除るも

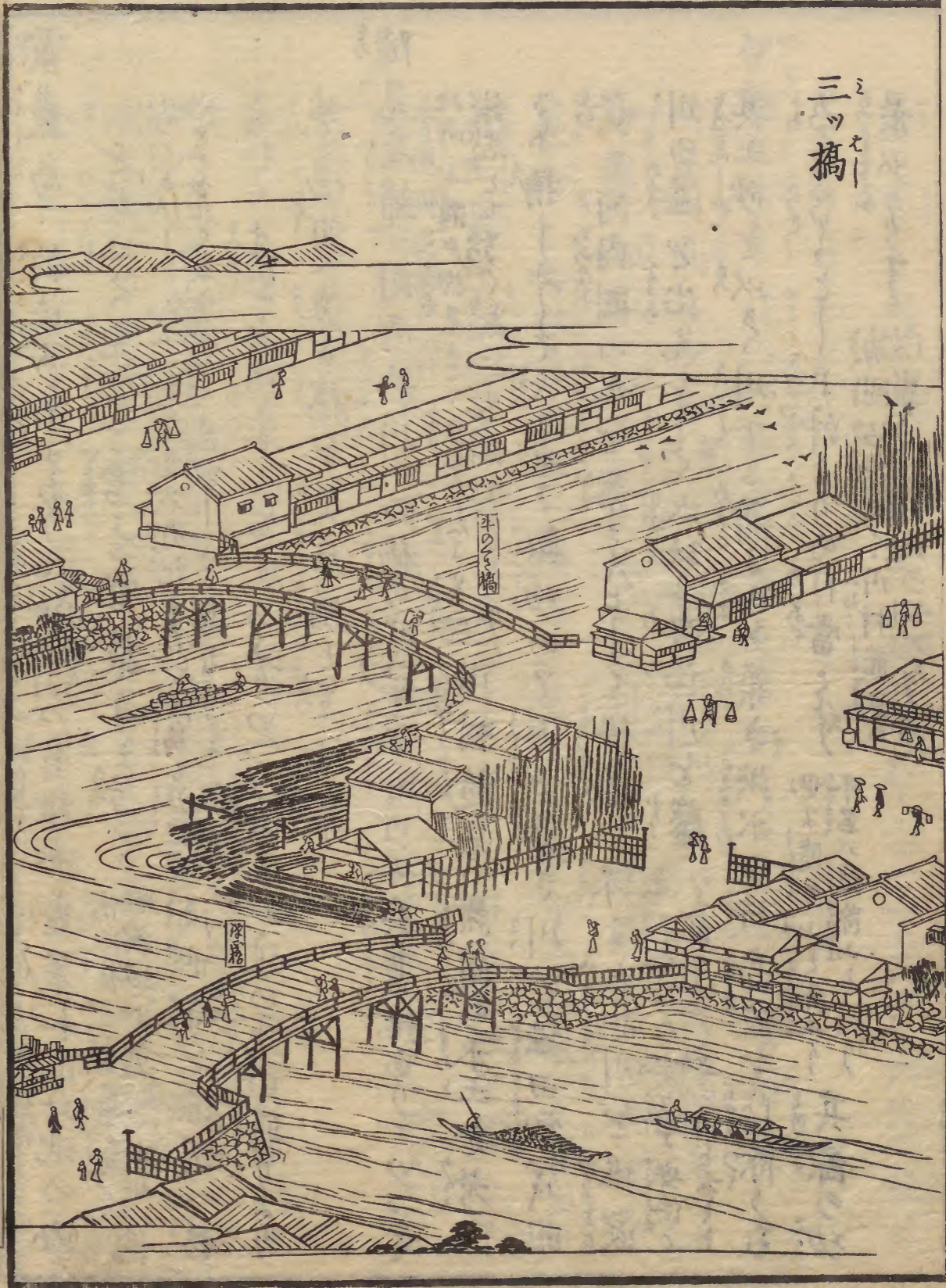
其功ありとて且沖よりの目當とす 世は隨見山と稱せり其餘の功

最少なり 菊岡沾京云く川村隨見ハ 本名ハ波除山といふ

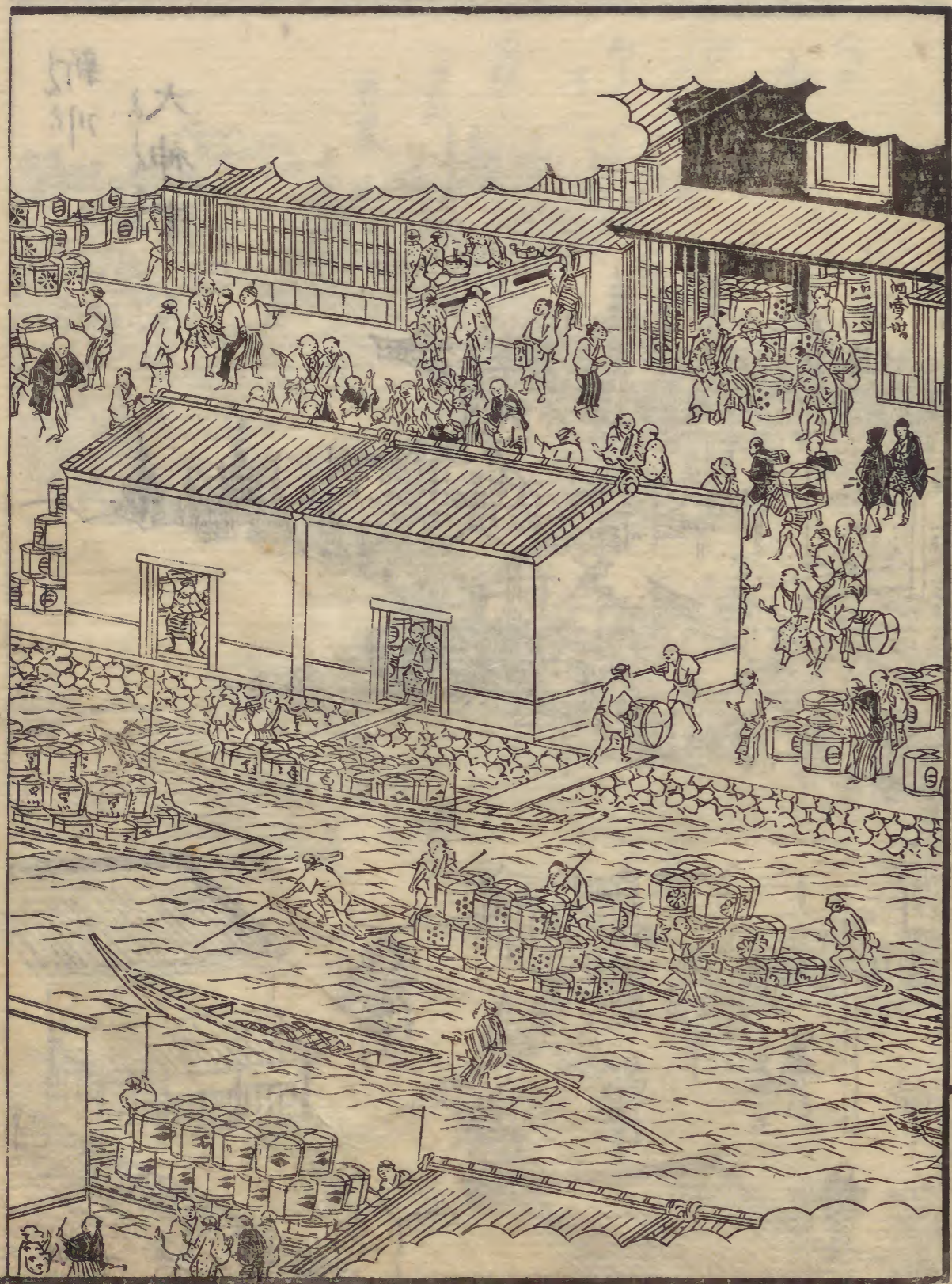
風羅袖日記  
ハテ塚少く  
菜の  
さや  
石の  
石此  
間  
芭蕉



三ッ橋



新川  
酒問屋





伊勢太神宮

同所四日市町あり

此地の産土神と

此所を俗に新川

伊勢内外両皇太神宮を勧請し

遷拜所と

遷宮

宮伊勢と同年なり

伊勢内宮の社僧慶光院比

丘尼江戸参府の折柄旅亭の假の為

御門並小比せ

御朱印地なり始祖の比丘尼内宮建立の時

今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より嗣傳

此上人の旅宿なり

年山紀聞云

永祿元年日記不詳後六月三日中山亞相信泰被於云去月廿三日神官御

上棟毎

慶光院以諸國勸進力此上棟取り立者之内又内宮上棟存立云云雖

不相應

諸國への廻船輻湊の要津

永代橋

架せしめらる永代島架せしめらる長凡百十間餘あり

深川

東南ハ蒼海中一房総の翠巖斜ニ開き

似て風光

芙蓉の白峯ハ大城の西ハ時荒波の遠嶺ハ墨水ハ臨む

台嶺金龍の空閣ハ緑樹の蔭ハ見え

薬師堂 靈巖島銀町あり別當ハ真言宗中々医王山圓覚寺

と号す

大宝年間ニ造立あり

像ハ

惠生阿闍梨此地ニ遷

此地

稻荷の社の

橋本稻荷社

同境内ニあり

大師の作

とり往古高野山の麓橋本の里ニ宮居を造

山城

伏見稻荷明神と同本同作あり

安

置あり

一尺

此所の鎮守と

社記

云神像ハ弘法

同本

同作あり

同本

同作あり

同本

同作あり

同本

同作あり

同本

同作あり

同本

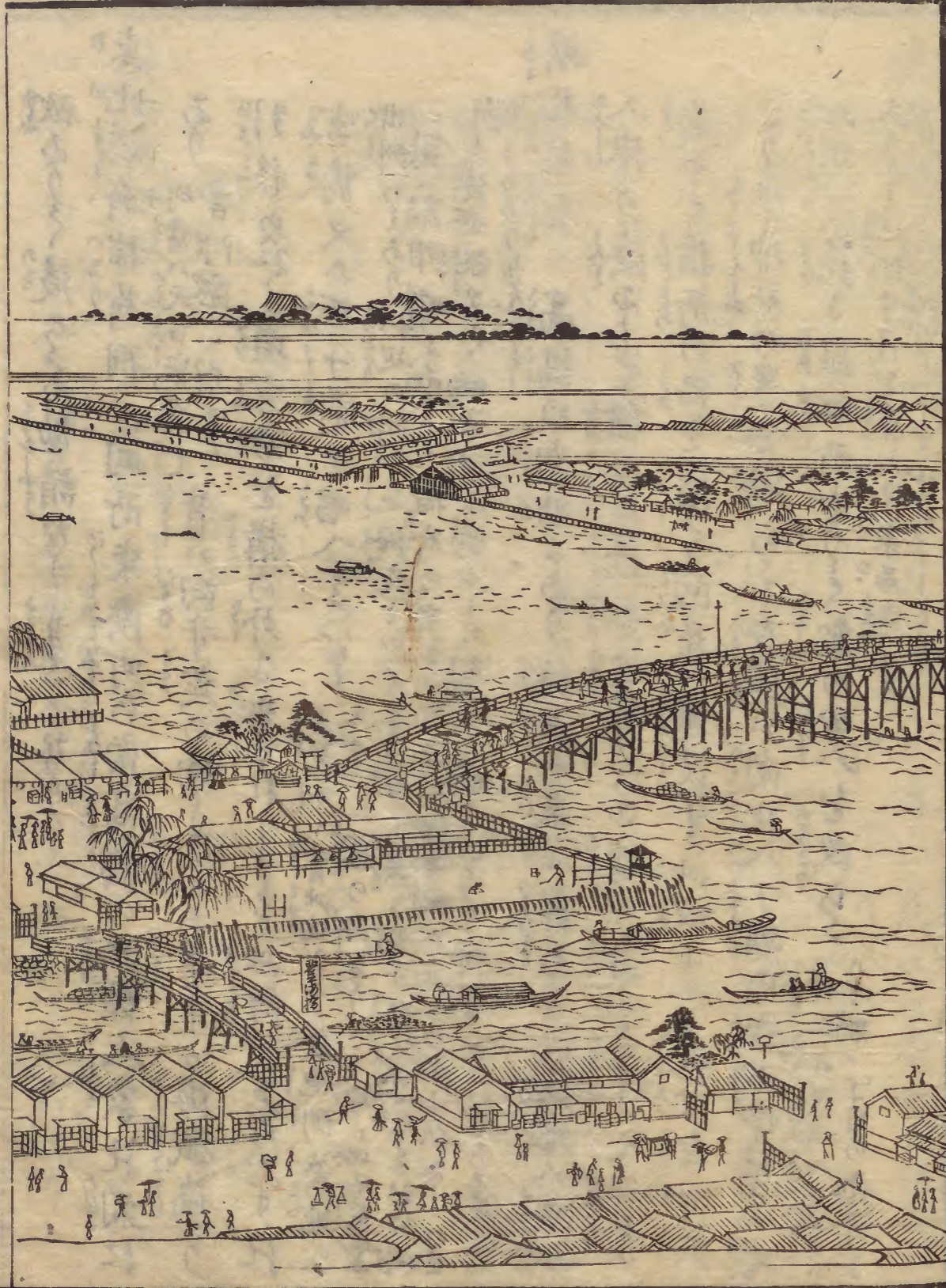
同作あり

同本

同作あり

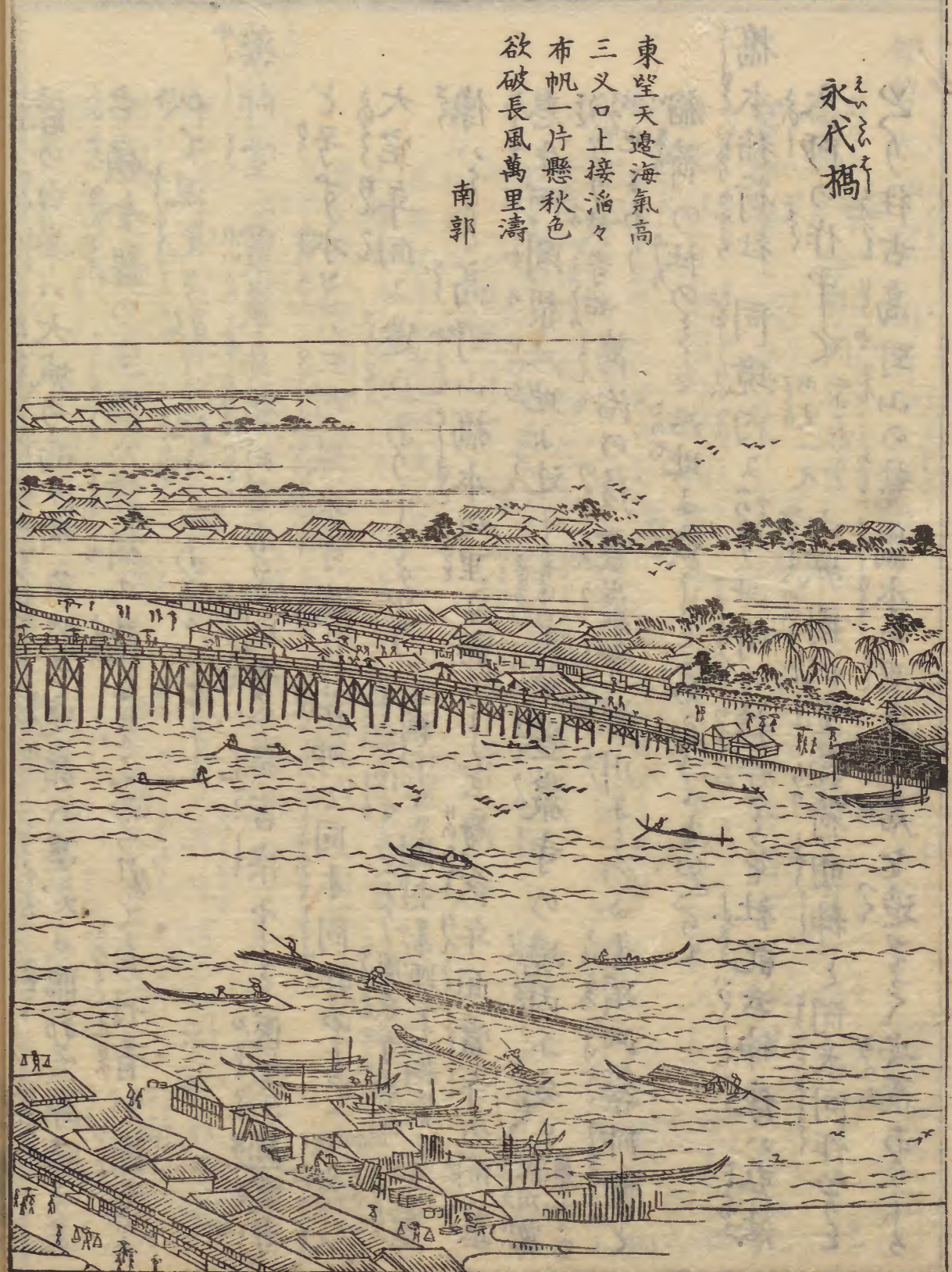
同本

同作あり



永代橋

東望天邊海氣高  
三义口上接滔々  
布帆一片懸秋色  
欲破長風萬里濤  
南郭





故ありく後ろふ勸請なる一書とあり

惠比須前稻荷祠 同所東湊町の南高橋の北詰人家此間に

あり 別當天台宗中 昔日向井彦のやきふあまのうら海賊橋あり

引移られ一頃宮居を構の外はゆられしと世所を多ひす此

宮前又ハ蛭子前と唱へしと云 古老云く昔此地より鑛炮洲築地へ

出洲のあり此辺の洲は芝海老とつるもの多く集る所なり 頃ハ此洲

と唱へ其洲崎はあり 稻荷の宮ありて海老洲の宮とのよひありしを

説く後世誤るく蛭子神は混一又夷子と稱ししりく附會せしありしをこの

湊稻荷社 高橋の南詰はあり 鎮座の来由詳かしく此地ハ廻船

入津の湊ゆて諸國の商船普くろふ運ひ碇を下しと此社の

前あり積所の品を悉く問屋へ運送す此故ゆや近世吉田家

より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又

此川口の北は監船所ありし船の出入を改らる 事合考云此祠昔ハ

鑛炮洲 南北凡八町ありしありし傳云寛永の頃井上稻富ホ

大筒の町見を試し不なりと或此出洲の形状其器は似し故の

号ありしと云 白石先生の説は此地ハ明暦火災後ハ桑山信長某を

記せり 今ハ薪炭石杯の問屋多く住せり 又故家珍苑の舊園ハ新

打切る月ハ世界の決地洲 此のやうなを住んぬく 半井

半井ト養翁居宅地 同所明石町の裏通あり 或人云延宝九年

敷ハ父ト養の時賜りしありと云云寛文江戸繪圖ハ十間町の

西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川ハ傍に記しあり 半井ト養翁ハ

東都の御醫官なり 牡丹花肖拍の裔孫なり 連哥ありし

狂歌を能せし此地を賜りし頃の口まゝなり

ト忠ハ本道とて思ひしやと云々外科リをう

了然禪尼菴室地 此地ハ住まへりし 紫の一本とて草紙子

んをり 禪尼の行實ハ第四卷落合泰雲寺の条下ニ詳なり

佃島

鑛炮洲

は傍ら孤島を以て

舟松町あり海渡あり

文龜年間江戸

の舊國は向島とあり天正年間

東照大神君遠州濱松の御城より皇都へ上り多項攝津

國多田の御廟あり住吉大神よりまうてまうて神崎川舟

なうて小佃村の漁父獵船をこきゆて渡りまうて伏見

御城より舟を時め御膳の魚をまうて旨台命あり又

西國へ使なると折りハかあつ漁船を以て仕へまうて

旨命ありハ大坂兩度の御陣より軍吏の密使或は御膳の

魚獵のり日と怠なく仕へまうてハその後漁人三十四人江戸へ

うされ慶長年間浅草川御遊獵の時網を引せまうて同十八年

八月十日海川漁獵止む旨免許なまうて

鑛炮洲の東の干潟百間四方の地をのり正保元年二月漁家を立並そ

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取らまうて

旨台命より毎年十一月より三月迄怠らまうて其

間ハ他の獵を堅く禁ゆるは猶その後深川八幡宮の前より

空地三千坪をありて佃町と号けりは御菜魚をこきまうて

りとなれり或人の説は此所ハ始安藤右京進やきの地中住吉の社

貢佃島ハ紀州賀茂の漁人難居一此地ハ殊更白魚は名あり故は

冬月の間毎夜漁舟は篝火を焼四手網を以て是を漁り都

下地より是を賞せり春に至り二月の末よりハ川上よ登り

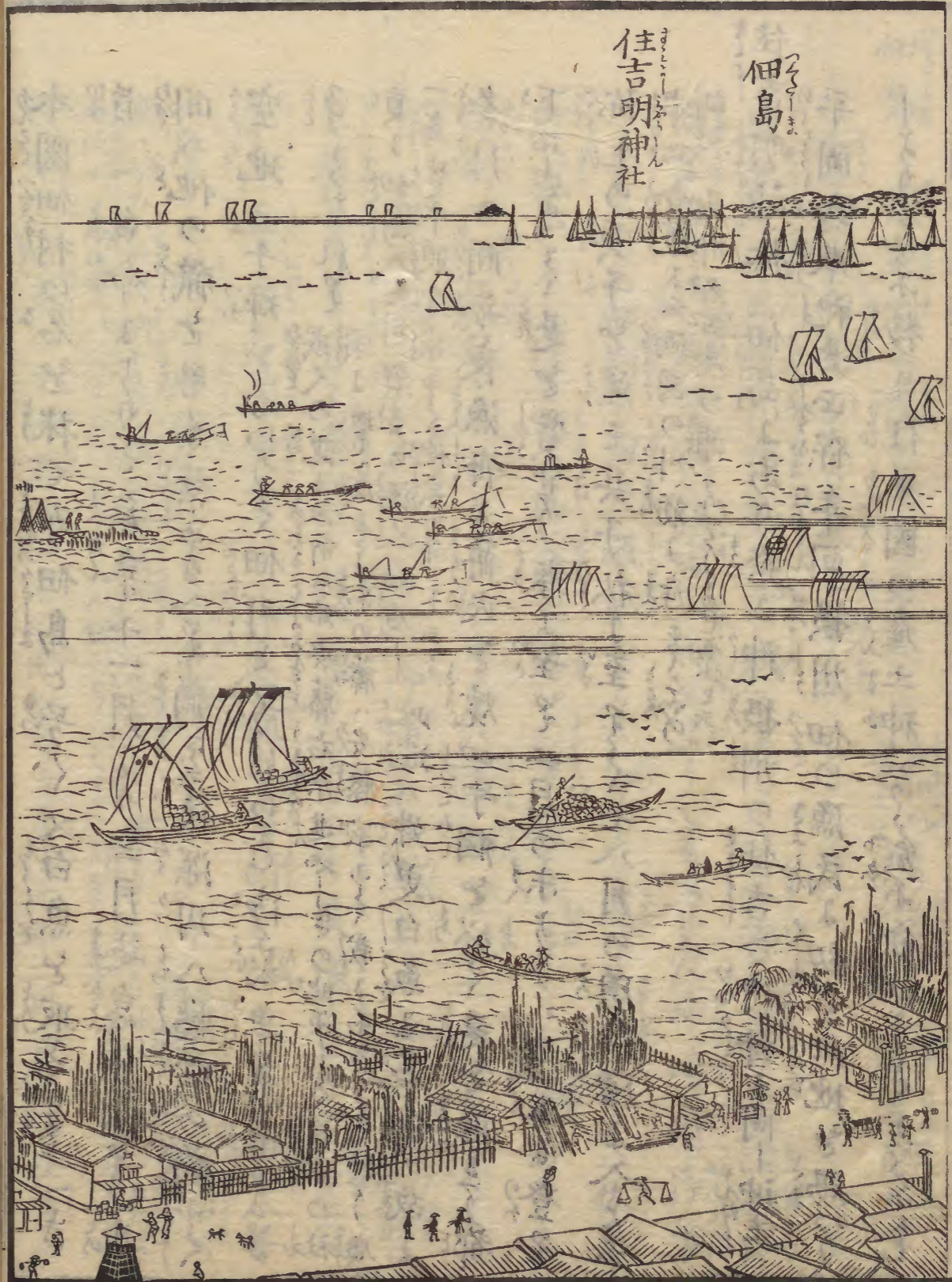
弥生の頃子を産む其子秋に至り七八月の頃江海よ入と云

事跡合考云西國の川筋は産まうての

住吉明神社佃島より祭る神攝州の住吉の御神は同一神主ハ

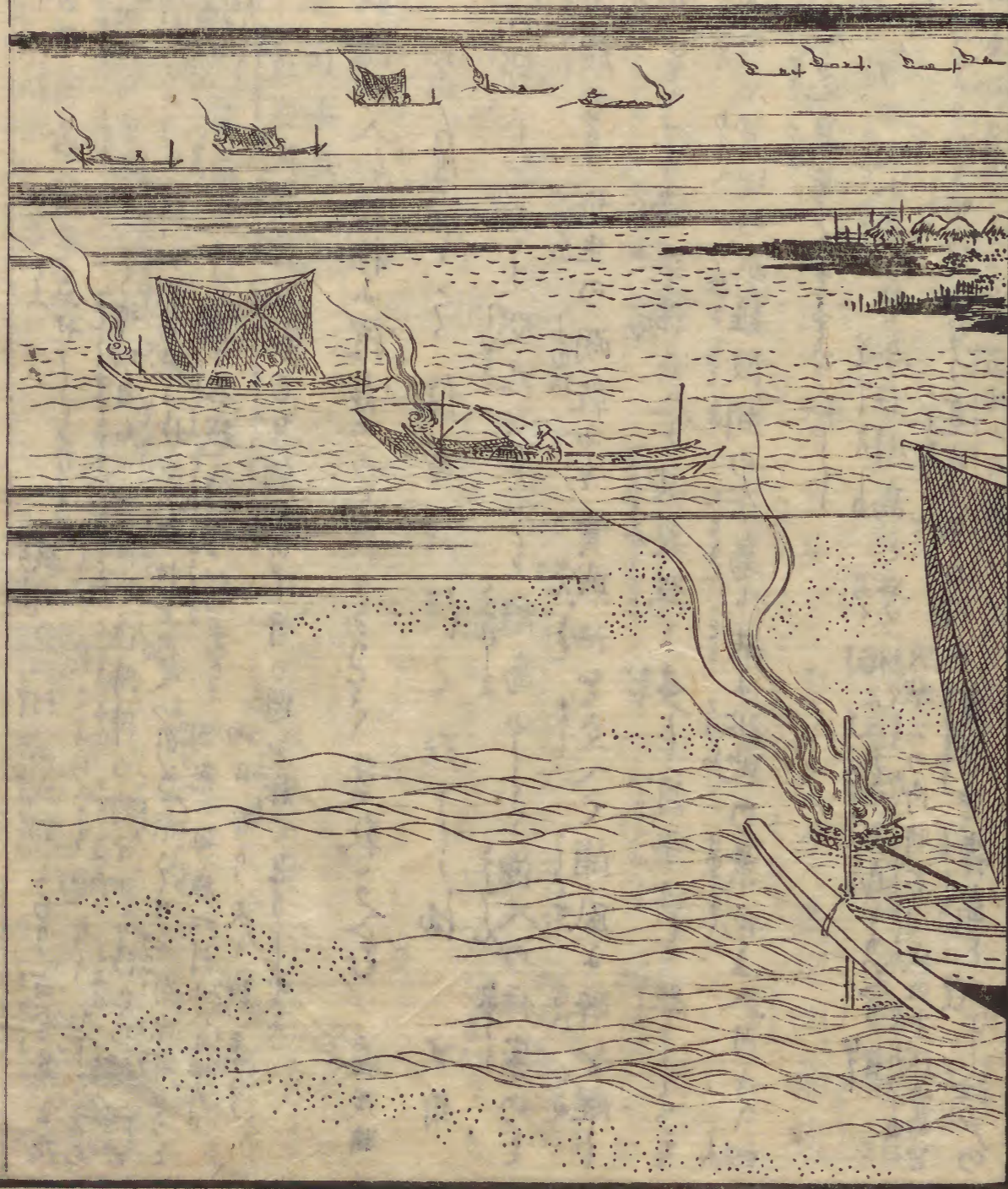
平岡氏奉祀を正保年間攝州佃の漁民は初め此地を賜り

一よりこふ移り住本國の産土神なる家分社一とあり

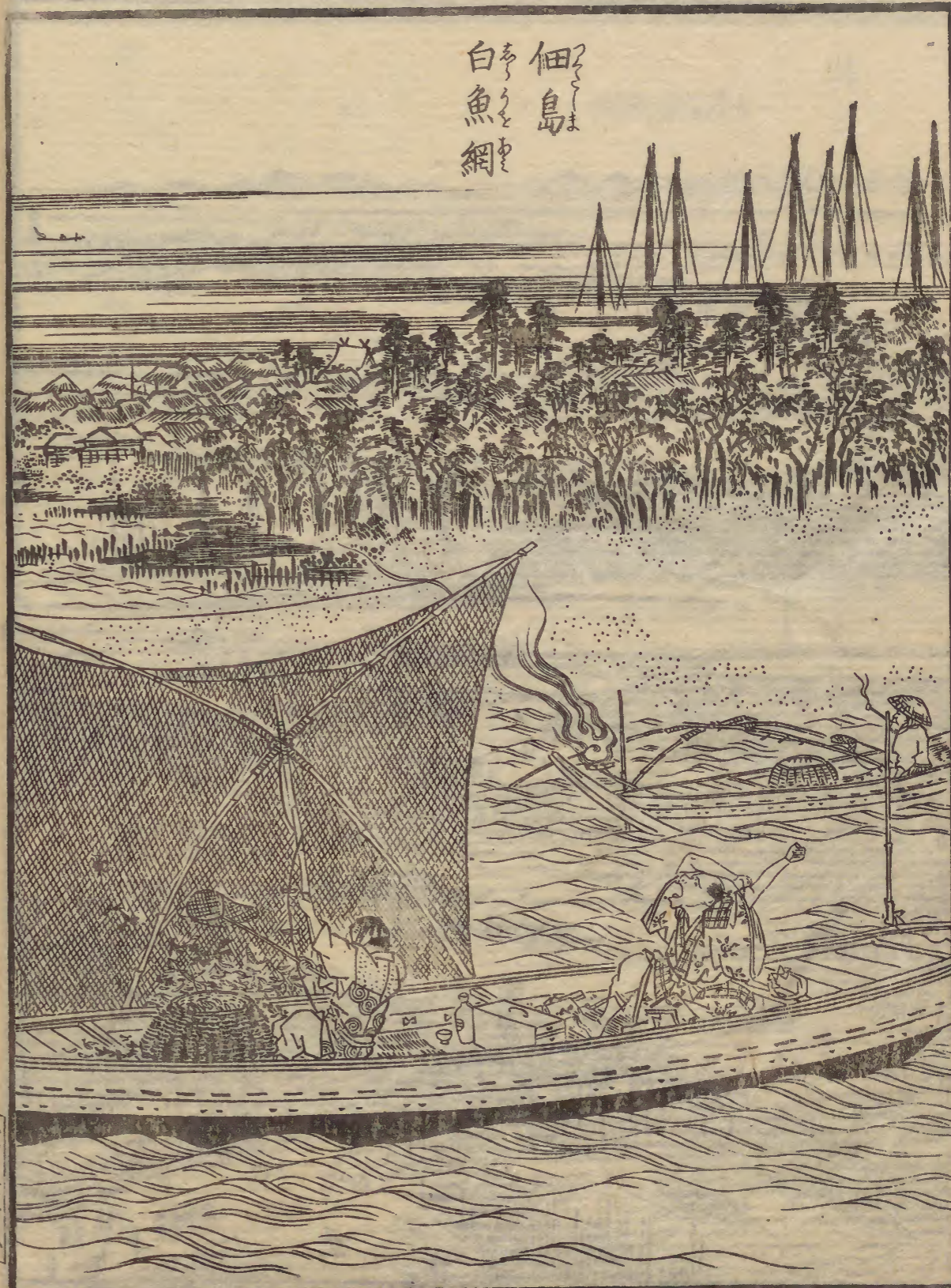




白魚  
價  
あ  
れ  
た  
ら  
ば  
い  
ち  
ま  
い



佃島  
白魚  
網





信濃

角

これ

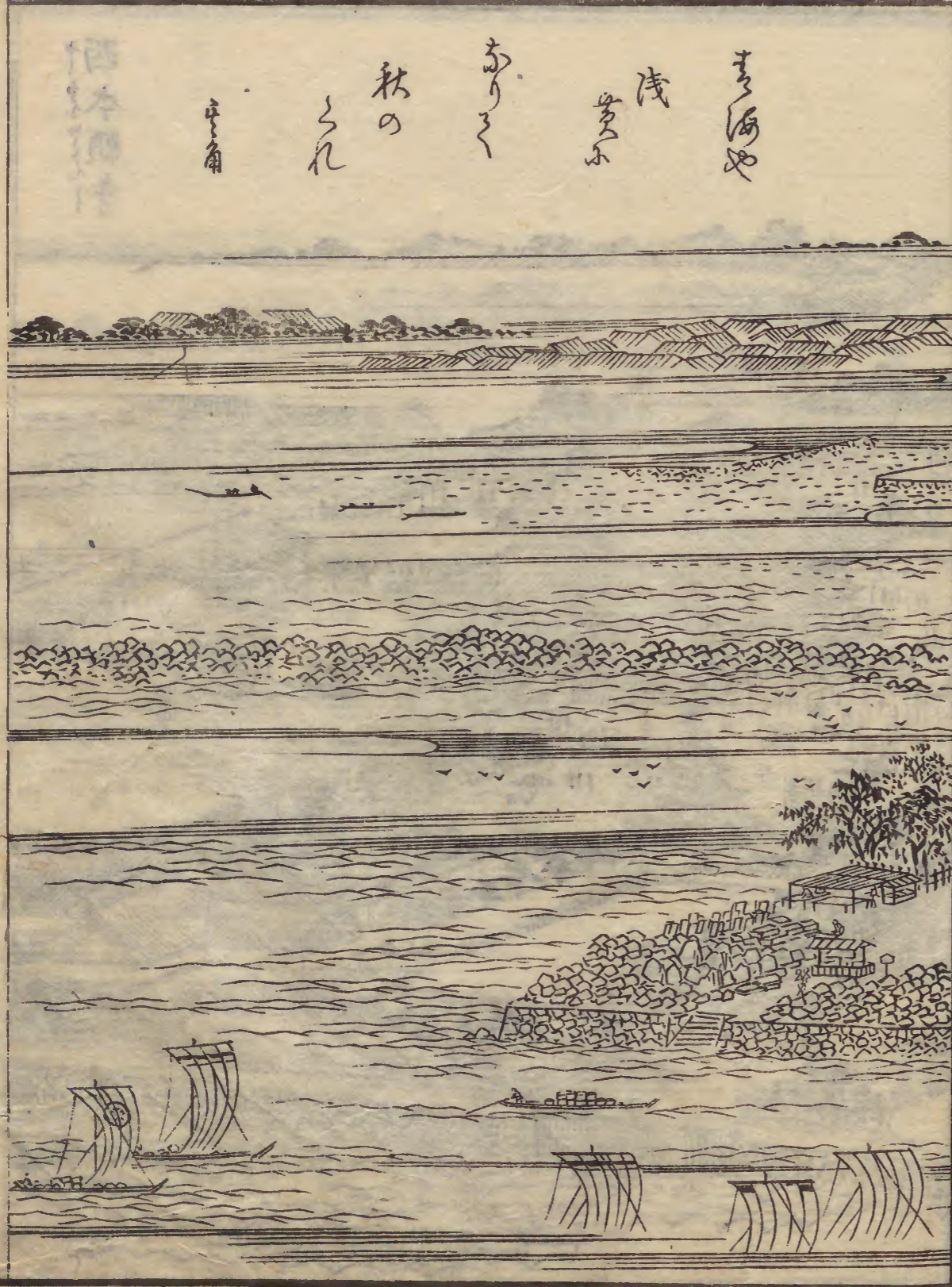
秋の

あけ

ふ

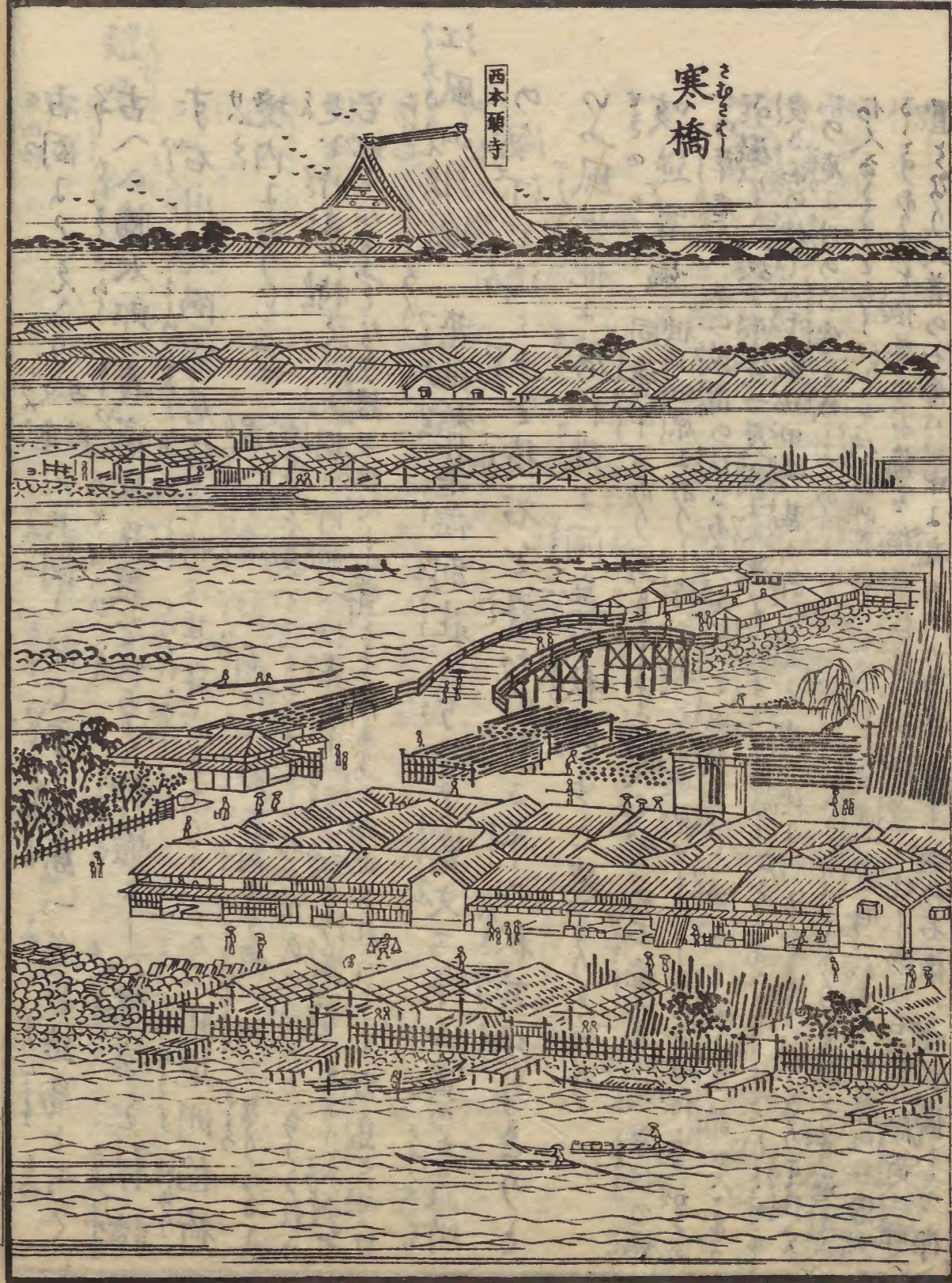
浅

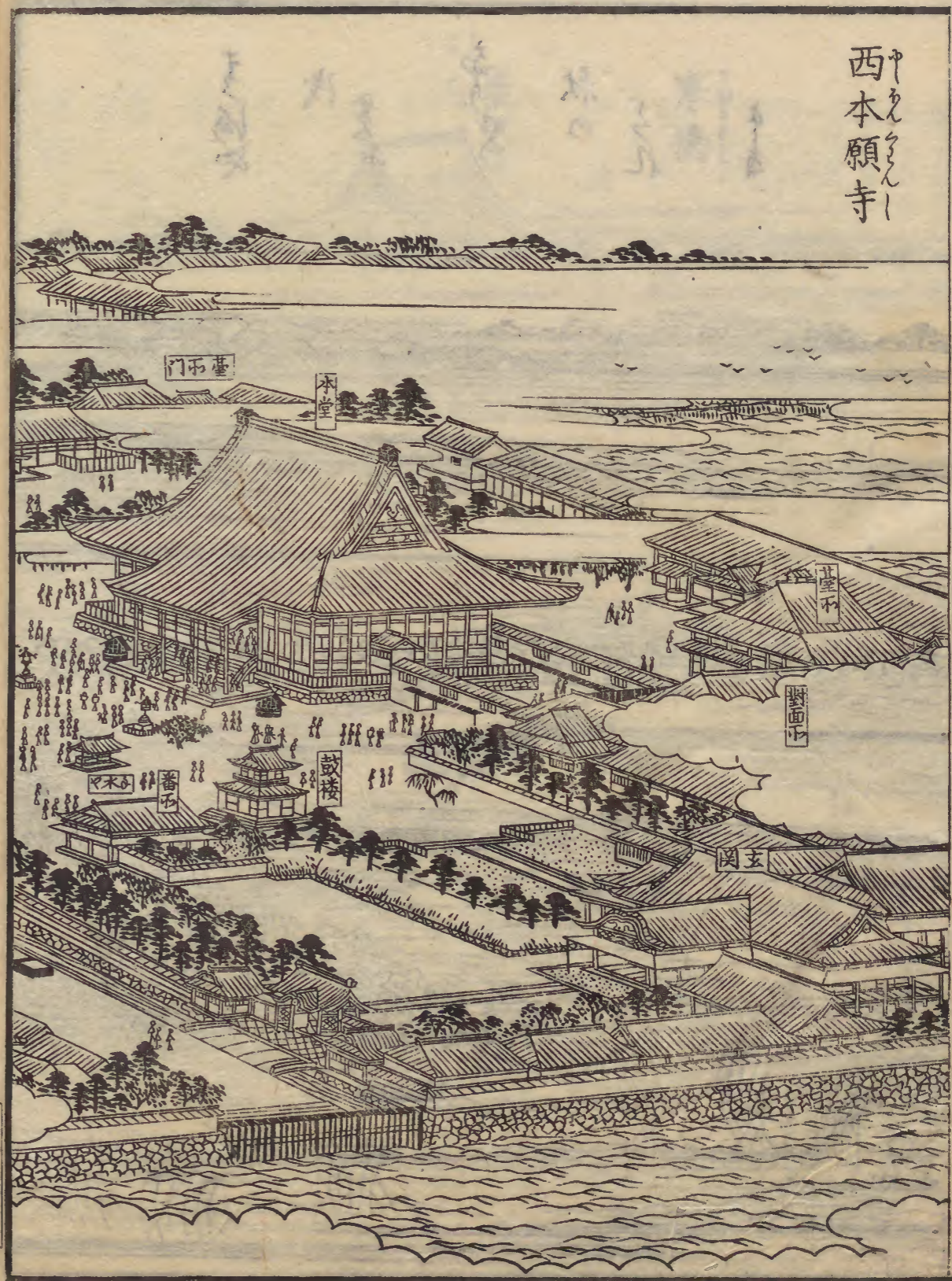
き海



西本願寺

寒橋





西本願寺





西本願寺 同所川を隔て北の方より俗に築地の門跡と云ふ  
 或人云此地ハ明暦四年の仰のう 一向の地  
 ありて 築地なりと云ふ 一向の地  
 所なり 築地のうを是と 塔頭五十七宇ありて始横山町二丁目の南側  
 裏通りふ河をてと明暦大火の後此地に移る 准如上人を當寺の

報恩講と云又俗に河内溝と称す 塔中成勝院に能仙杉風  
 立花會十一月廿八日河内山忌め七昼夜の法會修行あり是城  
 太子の彫像やと泉州堺の信證院よりうつす 毎年七月七日  
 水挽町四丁目より東の方此河内馬場あり常々賑々  
 講釋師浄瑠璃の藝ハ軒を並つて行人の足をとむ享保九年  
 此地は松平采女正定基のやきありてなり 同年正月晦日

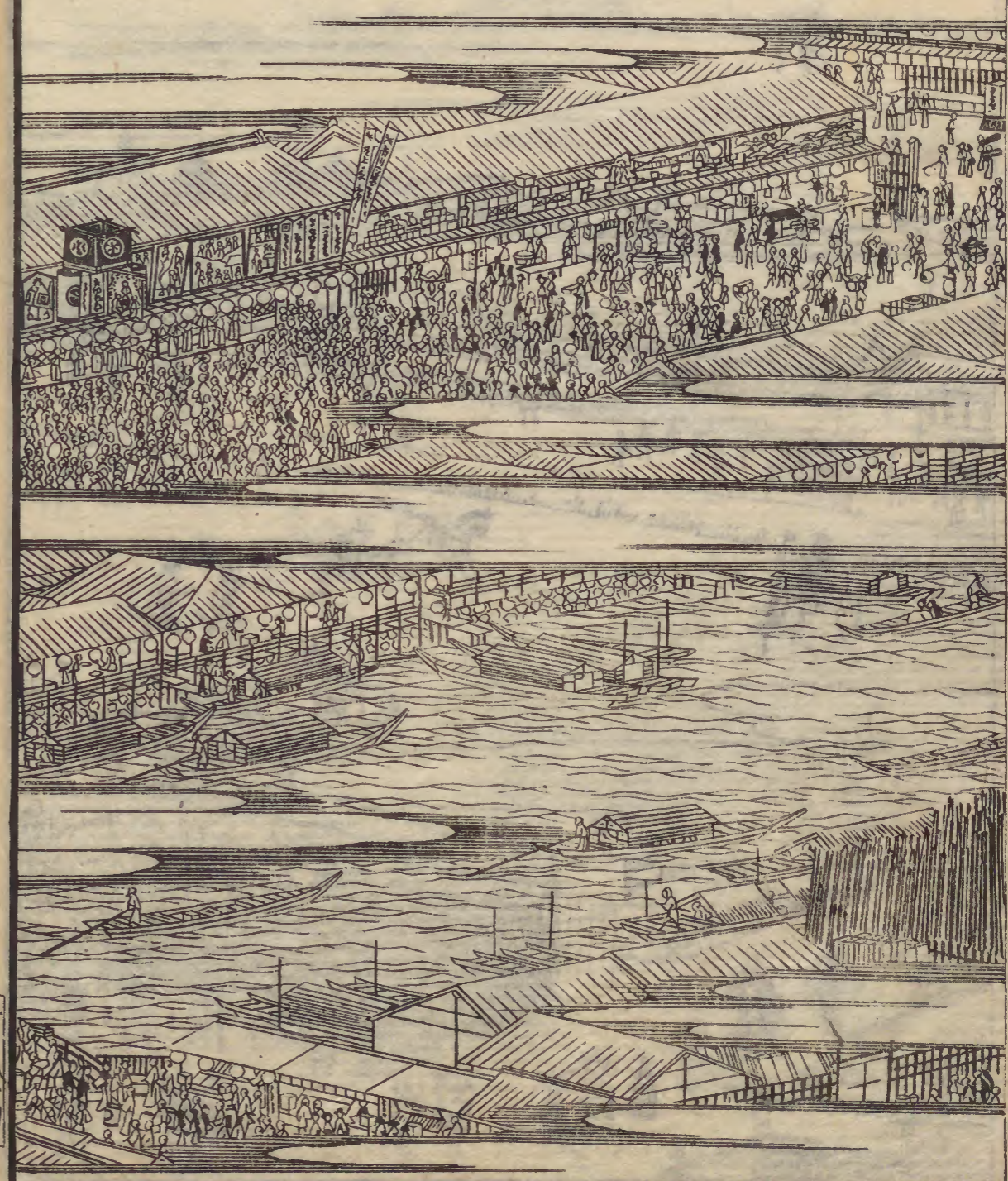
采女原

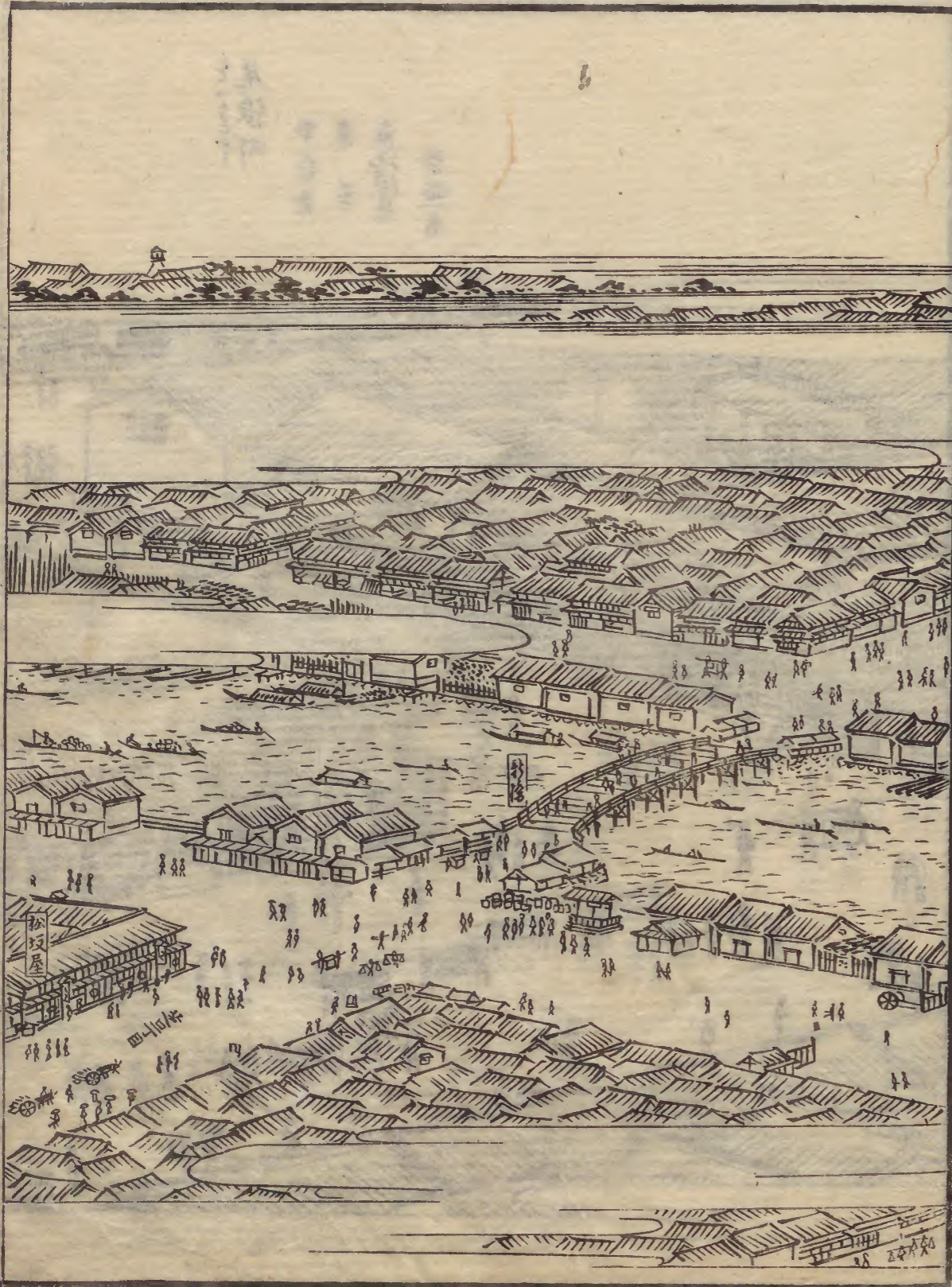


水挽町  
芝居



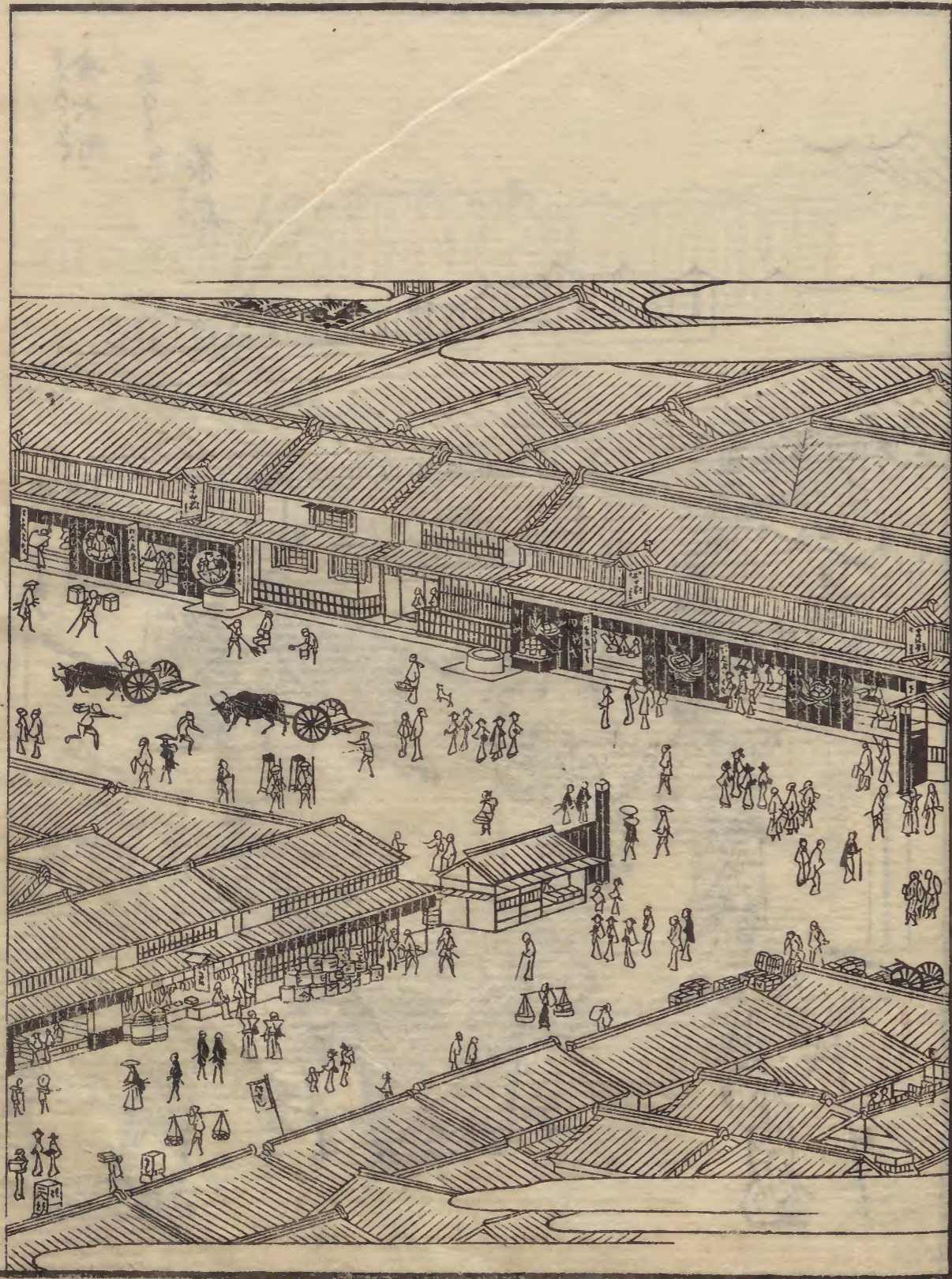
魚  
一  
二番  
老





新橋  
汐留橋





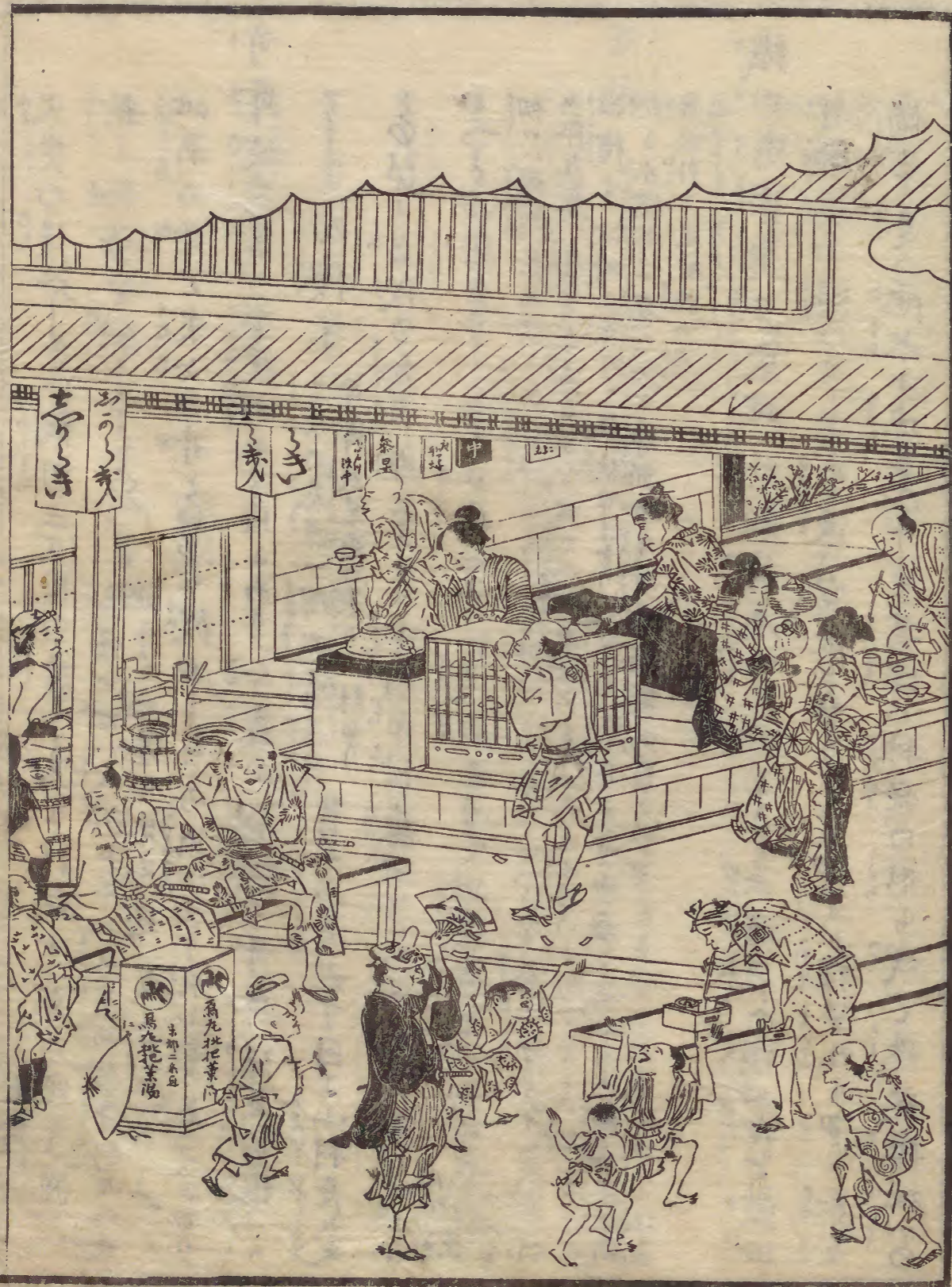
尾張町

布袋屋

電屋

惠比須屋

呉服店



きんろく  
金六町  
あつぎ  
茶店

火災の後やきハ麴町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃跡へ  
 新馬場を開くもこの頃馬場の地ハ天明五年今の芝西應寺町その代  
 此所の井と采女の井とのゆも彼やききの用水ありたふあつたあり  
 奇舞妓芝居 木挽町五丁目あり今森田勘弥の奇舞妓芝居綿々  
 とく相續す 芝居の基原ハ堺町青屋町昔ハ此所六丁目山村長太夫  
 とのひ名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居とありせり  
 まつ四座あり正徳四年の頃故ありて此芝居を止めり山村長  
 初ハ岡村長太夫と云実子なく枝子七十郎とて養て子とす二代岡村  
 五郎左衛門是なり後ハ名を改て山村長太夫といふ是ハ女子のありてハ智とて  
 相續す此の時に至りて断絶せり此芝居ハ正保元年申歳は始りて東海道名所  
 記ハ木挽町喜太夫浄瑠璃外異類異形のものと云ふるもあは昔ハ狂言  
 座の外ハんせ物の  
 織田有樂斎弟宅地 元教寄屋町の地なりと云慶長の頃此地と織田  
 有樂斎は賜りて後ハ空地となりて三四丁程芝生とあり春を  
 摘草夏ハ池水ハ涼んとて其頃ハ林泉の形も残り殊更櫻楓ホの

二樹多く春秋共遊望の地なり寛永の頃迄ハ折ふありて  
 大樹此地ハ遊獵をたせられり  
 融覚信長公の弟や茶道と利休居士は受て一家の風あり元和七年は卒せ  
 此人茶室を長す故宅地ハこの頃ハ教寄屋を建置れり四跡なりとて  
 後世土人教寄屋の歌とて町の名ハよりとてなり

新橋 大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ハ係正徳元年辛卯朝鮮  
 人來聘の前宝永七年庚寅此所ハ新橋門を造営ありて  
 芝口御門と唱へ橋の名ハ芝口橋と更けり享保九年正月廿九日  
 の火災は焼亡せり此後ハ復旧の町家とあされり此川筋の東木挽町  
 七丁目と芝口新町の間ハ祭せり  
 汐留とてなり

正徳四年  
 江戸圖







